

41707

教科書文庫

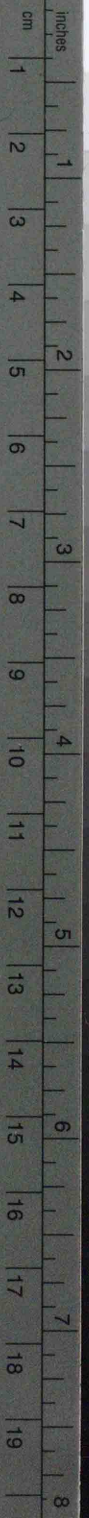
4
810
41-1918
20000 65658

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



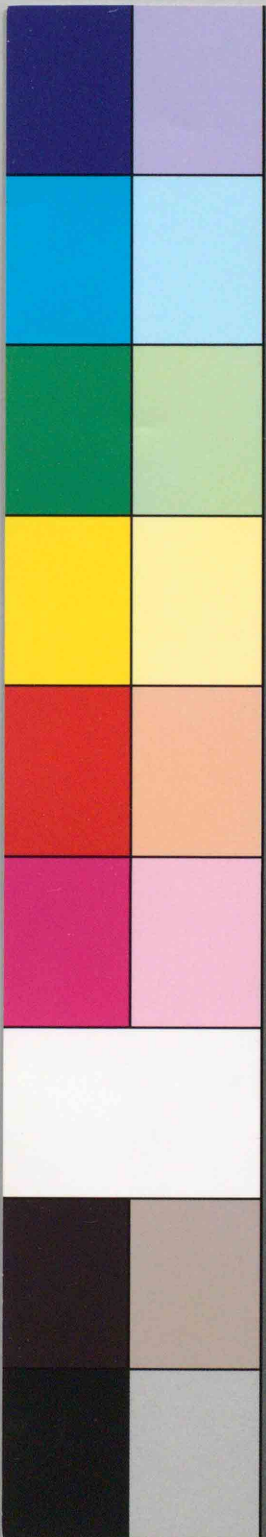
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
KT

中等
教育
國語讀本
新村出編
卷二



文部省檢定濟

大正七年一月廿六日 中國語科用

文學博士新村出編

中等
教育
國語
讀本

東京
開成館
藏版



卷二 目次

一	克己	幸田露伴	一
二	アレクサンドル大王	その一	六
三	同	その二	二
四	京城より	徳富蘇峯	一五
五	天橋の月夜	徳富健次郎	一六
六	渡り鳥	薄田泣菫	二三
七	ナイチンゲールを聴く	杉村楚人冠	三三
八	兎狩	徳富健次郎	三四
九	東京遊學を勧める(二日一信)		四〇

一〇	伊能忠敬の晩學	その一	幸田露伴	四
一一	同	その二	同	四
一二	肉彈			五
一三	青島入城式	その一	澁川玄耳	五
一四	同	その二	同	六
一五	白耳義の落人		杉村楚人冠	七
一六	勇士の行くて		幸田露伴	七
一七	地震の前兆		細川潤次郎	七
一八	震害地より(一日一信)			八
一九	根室の冬		河東碧梧桐	八
二〇	北海の紅葉		角田浩々	八

二一	歳暮		中邨秋香	九
二二	御講書始の記		細川潤次郎	九
二三	中江藤樹		橘南谿	九
二四	陳情書		中江藤樹	一〇
二五	私の母		夏目漱石	一〇
二六	津輕海峽		長田幹彦	一〇
二七	雪合戦		大町桂月	一〇
二八	賢所			一一
二九	紀元節			一一
三〇	日出づる國		中邨秋香	一一
三一	雑木林		徳富健次郎	一一

三三	一燈錢	久坂玄瑞	一三五
三三	カーネギー		一三九
三四	堅志力行	安田善次郎	一四七
三五	老僧の接木	室鳩巢	一五三
三六	歌聖としての明治天皇	その一	
		佐々木信綱	一五四
三七	同	その二	一五九

中等國語讀本 卷二

文學博士 新村出 編

克己

幸田露伴

以下臨時試験

克己

如何なる事業にもせよ、やゝ大いなる事業は、その事業に當る人、よく自己の私慾、私情（情欲）に打克ちて、始めて之を成就することを得るものなり。克己の工夫なくして、大いなる事業を成就したる例は、甚だ少し。又如何なる人の事蹟を見ても、その人にしてやゝ大いなる

愉快 階己 微蓋

る人ならば、その人は必ず克己の工夫に富みたる人なり。即ち克己の工夫を爲さずして、大いなる人となり得し人は、殆ど無しといふも可なり。蓋し自己に克つ能はざるほどの微力の人、いかでか能く萬人に勝るゝことを得ん。これ自然の數といふべきのみ。また人若し自己に克つことを能くしたりとせば、その人は即ち成功の段階に一步を上したる人といふべきなり。蓋し自己に克つの極めて難事たるは、勿論なれど、一度自己に克ち得たる時は、その克つことの難きだけ、その克ち得たることの愉快の大なるを感

辨悦 稍

ずるものなり。人一度この克己の愉快を感じて、その味を知る時は、常人が見て以て非常の困苦なりとなす事をも、悦んで處辨し、常人が見て以てその勞苦堪へ難しとなす事をも、楽しんで爲すことを得べし。例へば一日十里の路を行くは、常人の能くする所なり。十一里の路を行くことは、その差僅に一里にして、その一里を朝稍早く出でて歩まんには、歩み得べきなれども、曉の眠の心地好きまゝ、夙く起き出で難きは、常人の情なり。今この情に打克つて十一里歩みたりとすれば、他の人々は既に我が一里の後にあるな

緊、凜

り。我が情に克ちたる當時の凜然と緊張せし氣分、また今衆人に先んじて、一里進み得たる眼前の結果、いづれか愉快ならざらん。この愉快を味はひ得たる時は、その人は翌日の同じ場合に、自己に克つことの、昨日に比して甚だ容易なるを感ずべく、随つてまた常人に比して一里多く歩むことを、敢へてするに至るべし。是の如くなれば、次の日の夕には、その人常人に先だつこと二里となるべし。右の如き場合を重ねんには、常人とその人との距離非常に遠くなりて、遂に常人の如何にすとも及ぶべからざるに至るならん。

敢

卓、稟、薄

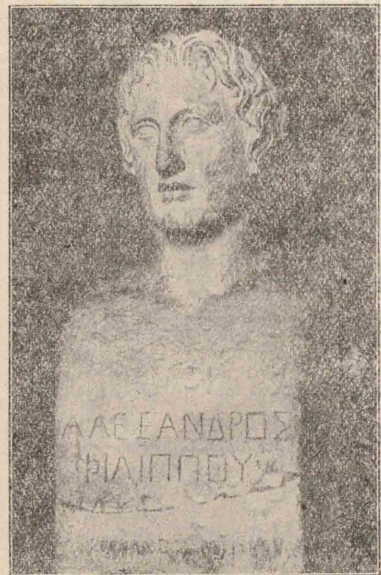
こゝに説きたる例は、やがて常人と卓絶したる人の距離の生ずる所以なり。元來天稟の資質の厚薄によりて、人の勢力に差あることは、争ひ難き事實なれども、先天の差によりて、凡人と非凡の人との距離の生ずるよりは、各人の心掛の差によりて、甲者と乙者との間の距離の生ずること、實際の世間に甚だ多きを見る。即ち克己の工夫を用ゐて事に勤むる人と、己に克つの工夫を毫末も敢へてせざる人との差は、日に日に漸く増大して、終には一方の人は非凡となり、一方の人は平凡に終るに至るなり。

毫

二 アレクサンドル大王 その一

マケドニヤ
今ギリシヤ王
國の北部。

世界の大英雄といへば、私どもはまづアレクサンドル大王を想ひ起すのが通例であります。大王はマケドニヤ王フィリップの子で、紀元前三百五十六年に生ま



王大ルドンサクレア

れ、十八九歳の時に既に戦功をあらはし、二十一歳で王位に登つてから、三十四歳で死ぬまで、僅十三年の間

に東方諸國を伐ち従へて、世界に類のない大國を建てた英雄であります。

膽
狩獵

大王は幼時から活潑で、大膽で、擊劍、狩獵などを好み、足が疾く、殊に馬術が上手であつた。或時父王フィリップの許に駿馬を賣りに來た者があつた。侍臣等は、どんな馬か、試さうと、馬場へ引出させて、乗つてみました。が、非常の悍馬で、誰も乗りこなすことが出来ませぬ。父王は、

悍

「こんな馬は役に立たぬ。」
といつて、返さうとすると、先程から、傍でじつと見て

ねたアレクサンドルは、

「乗りこなせないからといって、こんな良い馬を失ふのは残念だ。」

と、繰返し繰返しひきました。父王も遂に聞棄て難く、「どうして、そんなことをいふのか。大人でさへ乗れないものを、御前は乗れると思ふのか。」

と、問ひますと、アレクサンドルは、

「はい、私はあの人たちよりは上手に扱ふことが出来ます。」

と、きつぱり答へました。父王が重ねて

「お、さうか。きつとさうか。それでは御前、乗つてみるがよい。」

と、いつたので、

「はい、乗つてみませう。」

と、直ちに準備に取掛りました。人々はアレクサンドルが、小さいのに生意氣なことをいふと思つて、笑つてゐました。

アレクサンドルは馬の傍に進み、まづ手綱を取つて、馬の首を太陽の方へ向け換へた。これは、先刻から、馬が自分の影に驚き騒ぐのに氣が附いてねたからで

あります。それから、馬を少し前の方へ引き、ちつとでも暴れさうにすると、平首を叩いて、なだめておいて、やがて、ひらりとばかり飛び乗つた。そして、次第々々に徐ろに手綱を引きしめて、穩に馬をあしらひました。

だん／＼馬は從順になつて來た。今はもう驅け出したい、驅け出したいとばかりになつてゐるのを見て、アレクサンドルは、やと聲を掛けると共に、疾風のやうに驅けさせました。父王や侍臣等は、どうなる事かと、息もせずに見てゐたが、アレクサンドルが馬場を

喝

一廻り乗りまはして、悠々と馬を下りるのを見て、一同はその馬術の巧なのに感じ、喝采の聲は去ばし鳴りも止みませぬ。父王は喜の餘り、涙を流して、アレクサンドルを抱き上げたといふことであります。

三 アレクサンドル大王 その二

アレクサンドルは、世界の大學者アリストートルを師として、道德、政治、文學の事から、醫學の事まで學んだが、元來學問が大好きなので、著しく上達しました。殊にホーマーといふ大詩人の書いた英雄物語を愛

讀して、枕邊には常に短刀とこの物語とを置き、

「武士の精神を養ふには、これほど貴いものはない。」
と、いつてゐたさうである。又師アリストールを父
のやうに敬愛して、常に

「自分に生命を與へたものは、自分の父である。自分

を善くしたものは、自
分の先生である。」

といつて、師恩の大きな
ことを感謝してゐたと
いひます。



ルトリトスリア

懦

奢侈

嫌逸

當時、マケドニヤは最も強く、榮えてゐた國であつた。
アレクサンドルがこの國の王子に生まれながら、普
通の富貴の子弟の様に、懦弱暗愚なものにならな
つたのは、全く志が高く、大きかつたからであります。
大王は父王の權威を笠に著、又、奢侈安逸な生活をす
ることは、大嫌であつた。幼い時から、肉體の快樂を節
制する美德を具へ、又艱難辛苦と闘つても功業を成
さうといふ、燃えるやうな大望を抱いておました。
父王フィリップが他國を征服したり、強敵に勝つたりし
た報告が來る毎に、アレクサンドルは、こども心に喜

ぶと思ひの外、悲しんだといふ。自分の大功名を立てる餘地が少くなるのを憂へたからであります。父が如何ほどの大事業をなしても、子がそれ以上に出來ないといふ道理はないが、大王が父王のやうな偉い人の後を繼いで、富貴の樂を極めようとせず、もつと亂れた争のある國を引受けて、大智勇をあらはし、大功名を立てたいといふ、遠大の志を抱いてゐたことは、この一事を見ても、よくわかります。實に大王はその志の通り、父王の後を承け繼いで、父王以上の大事業を成したのであります。(少年鑑による)

四 京城より

大田王
徳富蘇峯

山陽一路、夏橙青く、稻梁黄なり。朝鮮海峽を渡れば、京釜道中、朝鮮人の白衣と其の屋上に乾かしつゝある赤き唐辛と相映じて、自ら一種の趣あり。釜山を出づれば、碧天寸翳なし。而して大田に至れば、急雨箭の如く、車窓を撲つ。更に京城に著すれば、月光霜よりも清し。四箇月有半ぶりに西大門外の愛吾廬に入る。周圍の人も物も悉く舊知ならざるはなし。卓を圍みて相與に歡笑し、更の深け行くを忘る。客を送りて出でて

大田
釜山より京城
に至る間の一
驛。釜山の西
北百七十哩に
あり。
愛吾廬
作者の家の號
なり。

窓外を眺むれば、満庭のコスモス今を盛りと咲き亂る。亦是一段の情味あり。

五 天橋の月夜

徳富健次郎

文殊寺のあたりは松蔭で、墨の様に眞黒い。此處に車を待たせ、天橋に渡らうとして、舟に乗る。所謂切戸の渡である。

洲郷船

ぎいと船が響いて、舟は墨染の濃い松蔭から白々とした月下の海に出た。海というても浅い洲の上の水である。何といふ良い月夜か。雲一つない空にのみ照

壁

了渚 隼

るかと思へば、水中に天があつて、其處にも月は壁のやうに光つてゐる。何といふ清い水だらう。月明りにも水底の砂が分明に數へられる。此處は橋立切戸の渡か。もしくは天河を今渡つてゐるのではあるまいか。船頭よ。ゆるやかに舟を行つてくれ。もつと徐かに行つてくれ。然し如何程徐かに行つても、彼岸は近い。するくと舟はもう天橋の渚に著いて了うた。舟から上つて踏む白砂は、もう天橋立である。此處らの松は、植ゑついで間もないと見え、まだ稚木で、まばらである。月明りに雪とか、やく砂を踏んで、だんだ

俯

ん奥へ入つて往く。十一月も半ばといふに、蟲の音がする。歩むにつれて、松蔭はだん／＼深くなり、はては月光より松の影が多くなつた。

何といふ明るい月だらう。仰げば、松の一葉一葉が、白金のピンを敷へるやうに讀まれ、俯く砂には、また一葉一葉の影が、黒くあざやかに讀み得られる。

松間の路の曲る處に來た。余は松の幹に倚つて立ち、友は砂に蹲踞んだ。余は黙し、友も黙してゐる。ひつそりした天橋立に人籟が絶えて、たゞ何處からともなく、ざあ／＼といふ音がする。松風か。否、足下の松影は、

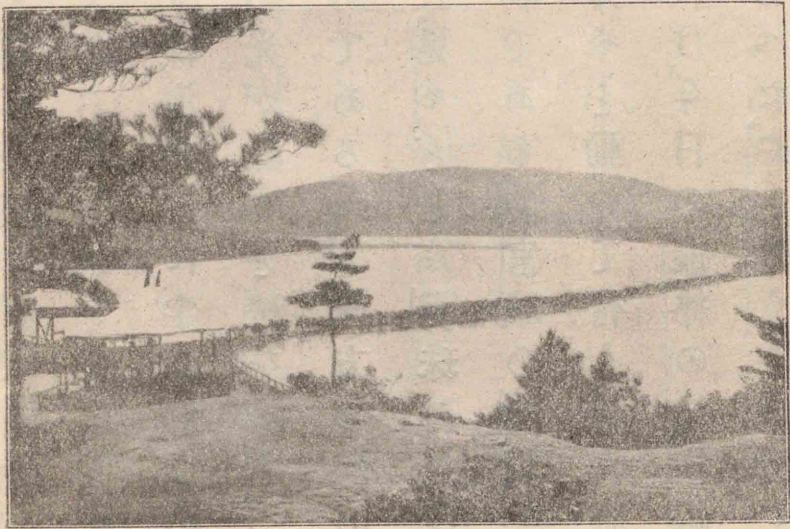
蹲踞
黙
籟

與謝海
故

汀

花崗石

腰



天

濃い墨で描いた様に、少しも動かぬ。音は與謝海が天橋一里の白砂を舐める音に外ならぬのである。その音に引かれて、

橋

汀に出てみる。

立

其處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。竝んで腰をかける。月下にほの白く眠る與謝海、そ

懷浸連紅寶石琥珀

の懷には璧の様な月を抱き、寢息かとはかり、ざぶり又ざぶりと音して白砂浸す漣は、まるで眞珠をこぼす様。海の南に、半圓形に山下に沿うて紅寶石や琥珀の光が點々と灣を縁どつてゐるのは、あれは宮津の町である。ふと此方の海の上に不思議なものが現れた。晃々とした明珠の幾段にも列んだ、尨大な横長い物である。龍宮城の出現——と見る間に、それは宮津の方へと動いて行く。龍宮城が移動すると見たのは、それは、今日の最終の連絡船が、宮津を指して行くのであつた。やゝ暫くその行くへを見送る。龍宮城はあの

慰

宮津灣頭に百千の龍燈のきらめく邊にびたりと附いて了うた。あとはたゞ熨した様な與謝海が、照りまさる月の空と靜に相見て相抱き、一里の松原の枝も鳴らさぬ天橋立の長い汀に沿うて、ざぶり又ざぶりと漣のさゝめくばかりである。

矣

汀からまた松原に戻つて、奥へくと砂路を歩む。さくさくと砂を踏む二人の足音の絶え間に、波のさゝめきが慕うて來る。幽に蟲の音がする。松蔭はますます深くなつて、はては砂の上にこぼれる月影が、ちらちらと螢ほどに細かくまばらになつた。と見ると、此

螢

鎮

處にひつそりと鎮ります社がある。大方、橋立明神といふのであらう。松影を浴びたその宮に、人影もない。人聲もない。燈明一つ點つてゐない。

良

二人は其處の松に倚りかゝつて、黙つて良久しく立つた。

「歸るか。」

「うん。」

この言葉がかはされたのは、大分經つてからであつた。二人は松蔭から月明りに出て、砂路をぶらりぶらりと切戸の渡に來た。切戸の水は全く天河のやうに

薄

美しい薄に立つて、むかうを見れば、眞黒い彼岸にただ一つ赤い灯が見える。文殊の渡守の小舎の灯である。

「おうおゝい。」

渡守を呼ぶ余の聲は震るへた。銀河を渡る前、二人は月の天橋の端に立つて、暫くその灯を眺めてゐた。

六 渡り鳥

薄田泣菫

私達が七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私達は

雁、棹、鍵

それを見かけると、吹きさらしの野路に立って、空の一方を振仰ぎながら、

「雁よ、棹になれ。」

棹になつたら、鍵になれ。」

と、その長い行列が次第に雲の中にとじみ込んでしまふまで、聲をからして叫んだものだ。去かし、いつの間にか雁も少なくなつて、今では、晝間その長い列が空を渡る様な事は、よくく、人氣の遠い野原か何かでないと、滅多に見られなくなつた。
話頭の他、轉し時、讀者、想像、三つ、時、角、不、渡り鳥の初客といつたら、さやうさ、ま、一、鴉、と、でも

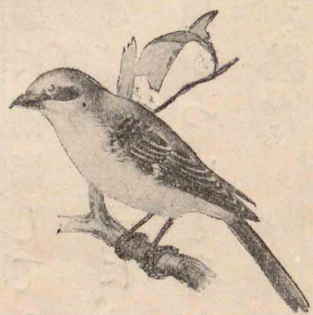
鴉

甲

矮、櫟

瞬

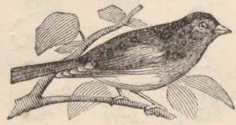
いつて置かう。秋の彼岸が過ぎて、そろく日影が黄色が、つて來ようといふ頃、私達はどうかすると、暖い日の午過ぎ、そこらの木立で、甲の高い、鋭い聲を聞く事がある。あ、もう秋だなと、思はず振りかへつて見ると、矮小な櫟に交つて、づぬけて脊のひよる高い榆の木に、鴉が一羽止つて、黄色な夕日を受けて、羽莖が金のやうにきらしくしてゐるのが見える。私達はその瞬間、言はう様のない強い、すこやかな氣持が、胸に流れるのを覚える。



鴉

鶯 鶯 鶯

鶯の次には鶯が来る。山家の晝すぎ、懶さうな蟋蟀の
 聲もいつの間にか鳴き止んで、枯葉ひとつ寝返りを
 打つ音までが、はつきりと耳に入る。静けさの底に、ど
 こからともなく、幽な聲が洩れて来て、何の音とも分
 らない。すると、木蔭の葦、島か何處かで、餘
 念もなく、せつせと仕事に精出してゐた
 農夫が、ひよいと顔をあげる拍子に、すぐ
 鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥が、ついと身をそ
 らして、逃げて往つてしまふ。それが鶯だ。
 鶯といつたら、まるで悲哀でも抱いてゐる人のやう



鶯 黄

拍子

御辭儀 雀 唄 柔 背 時雨 掠 眩 蝶 蛸

に、大抵は連にはぐれて、唯一羽で来る。そして、そこら
 御辭儀の小枝にとまるなり、ひよくりくくと軽い御辭儀を
 して、さゝやく様な聲で唄ひ出す。
 鶯が来て、ものの十日もたゝぬうちに、また四十雀が
 来る。この鳥は鶯と違つて、十羽も二十
 羽も群を組んで来る。山から里へ移る
 時などには、まるで時雨でもするやう
 に、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそ
 こらの木立におるすなり、眩しい程すばしこく、蝶、蛸
 などを啄きまはしながら、鼠色の背をそらし、柔かみ



雀 十 四

透徹

鷓鴣

のある胸の圓みを見せて、銀の鈴を振る様な透徹つた聲で、早口にしゃべりつづける。

小雪がちらつく頃になると鷓鴣が来る。これは鷓鴣と同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりとあたり

を忍ぶやうにして来る。初冬の午すぎ、



鷓鴣

山近い田舎の小家で、爺は炬燵に靠れかゝつて、こくりくと轉寐をする。そ

干菜 檐 煤 轉寐 炬燵 爺

の側で、婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に、檐に吊るした干菜の影が見すばらしく映つて、時をりちつばけな小鳥の影がちらついたりする。

紡錘

どうかして絲目が切れて、眠さうな紡錘の音がぱつ

たり止むと、こそくと掛菜をむしる音がするが、老人の耳にはそんな音の聴取れやうが無い。婆さんは

うつむいた儘、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい

竹籬

ひよいと小さきみに籬を傳つて、隣から隣へと、狭苦

頬白

しい物陰を出たりはひつたりして、移つて行くのだ。鷓鴣とあとさきになつて頬白が来る。冷い雨のびし

よびしよと降るなかを、獨者の頬白が灰色の胸までびしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止

解

つてゐるのを見ると、私の國では、この鳥の鳴聲を解いて、

「一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな。火の用心。

今度の便に金十兩、

やりたいけれど、一文も御座なく候。」

と、言傳へられるのを思ひ出す。

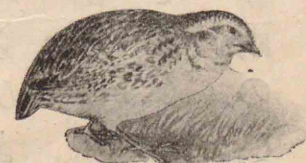
後の雑木林にこんな小鳥が来る頃に

なると、野らにはもうそろく鶉が來、

鶉が來てゐる。



鶉



鶉

鶉鶉

七 ナイチンゲールを聽く 杉村楚人冠

僕等は月明に乗じて、ナイチンゲールを聽きに出かけた。

村を出離れて、更けた夜の野道にさしかゝる。大地は

流れるやうな月の光對照仰げば星の疎な空の色、目に入

るものとしては、彼方此方にぼやくと立つた低い森、

何處を果ともなく打續く生垣、今は戸を鎖して人聲

もせぬ街道筋の居酒屋、音も立てずに、くるりくと

中空に廻る風車。一時々遠乗から歸る自轉車の火影

生垣

腰

が、遠くからちらついで来る。これが疾風のやうに駆け通る時は、必ず「今晚は」と挨拶して行く。

小一里も来て、大きな雑木林に著いた。豫て見定めておいたといふ木柵に探りよつて、その上に腰を掛けた。高い森が両側に立つて、その間に廣い街道がある。人通りの少い處として、その街道が大方草に埋れて、僅に中央に細い徑を留めたばかり。月はちやうどこの細徑の眞上を照らして、四邊はさながら晝のやうに明るい。しんとして、人聲も何も聞えぬ。

「ひゆう、ひゆう。」

留

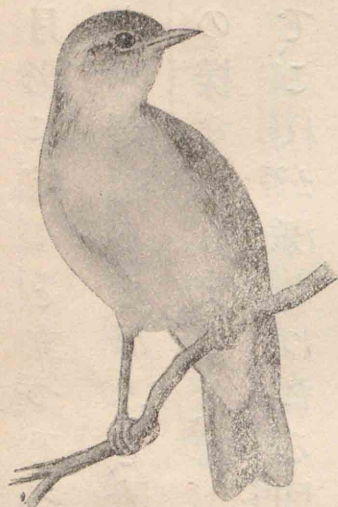
啼

「そら啼いた。靜に、靜に。」と言ひかはず。天地はひつそり、聲はそれきり聞えぬ。やゝ暫くして、

「ひゆう、ひゆう、ひゆう。」

今度こそそれだ。また利耳を立てる。また止む。僕等はそれから草に覆はれた木柵の邊で、かれこれ一時間も無言で待つたが、とう／＼啼かぬ。

踵



ルーゲンチイナ

夜は更ける。寒くはなる。せうことなしに一同踵を旋して、ぶらりとやつて来ると、遙に遠い雑木林が

七 ナイチンゲールノ聴く

月影にぼうと立つてゐて、その中で頻にナイチンゲールが囀る。と思ふと、隣の森からも囀り返す。成程、鶯の様な節も交るが、鶯よりは遙に長い變化のある節で、これが冴えわたる月にひやくところは、如何にも面白い。僕も年來の望を始めて此處で遂げた。月を踏んで、ぶらりくと歸つたのは、ちやうど十二時すぎ。

八 兎狩

徳富健次郎

濟

收穫が濟む。霜が降る。裏山の楓が染まる。すると兎狩

遺楓

の季節（シキ）がそろそろ始る。つくる（ツクリ）ひに遣つてあつた網も出來て來る。何日は兎狩といふ貼札が出る。脚絆、草鞋の用意に急がしくて、僕等は何も手に著かない。

拵 塾 冴

愈その日になつた。炊事番は夜半（ヨルナ）に起きて、握飯を拵へる。皆が支度して塾の庭に勢揃へする頃は、午前（アサ）三時過でもあらう。月が白く冴えて居る。三たび鬨の聲を揚げて、月影を踏んで出かける。大人組は網をかついで、高らかに詩を吟（ウタ）じて行く。僕等は黙つて、併し心は得々として、ついて行く。ねむさうな鷄（トリ）の聲のする村も過ぎ、けたましく犬

曉闇

焚火

焔

摩

の吠えかゝる村も過ぎ、野路を通り、谷川を越え、もう一里半も来たらう。月が落ちて、野は一面の曉闇、前に行く者の姿もはつきりとは見えぬ。ふと、すばらしく大きな、眞黒なものが、鼻の先に現れる。山だ。目的の山だ。まだ早い。皆焚火をしながら天明を待つて居る。僕は藁の上に寝ころんで居ると、背は寒いが、顔や腹は焚火で暖だ。炎々と立昇る焔の間に、ちら／＼見え居た一同の赤い顔が、次第に遠くなつて、つい／＼とひとりと一寐入したと思へば、起される。眼を摩つて起き上ると、成程天明だ。東が白んで、曉の風が切る様に

開

面を吹く。焚火の跡だけ黒い圓を描いて、四邊は一面の霜だ。やがて勢揃へして山へ向かふ。進軍の號令がかゝる。鬨の聲が一時に揚る。二山も追ふ頃は、もう朝日が晃々と秋の空に昇つて居る。



彩色

狩 兎

今おもうても愉快だ。秋が黄に、紅に、紫に、鶯に、あらゆる彩色の限を盡くした木を押し分け、葉を打ち

棒

落膽

覗

はらひ、聲をあげて登る心地。網近くまで追ひつめて、如何かと思つて居る時、何處からか「とれた」といふ聲がして、吾知らず棒を振つて勝鬨をあげる心地。網番をして、攻寄せる勢子（下カラ追ヒルモ）の叫の間近になるに、兎のうの字もかけて來ず、あゝだめと落膽（カガリトヒカシム）する時、突然がさがさと音をさせて、覗く鼻先へ飛び込んで、二つ三つ網ながらにとんぼがへる兎を、樹蔭から飛びかゝつて押さへる心地。落葉かき分けて、谷川の水を口づけ（コヨウケテ）に飲んで、木の根、草の上に脚投げ出して、握飯にかぶりつく心地。食つてしまつて、落葉の床（ネゴ）にあをむき（モラレテ）に臥

閑

葛葛

還泉縛

て、碧玉（まひん玉）よりも澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顔を冷々した風に吹かせる心地。數へ立てると、際限（ワケガキ）も無い。秋の日の短さ、まだ三匹しか取れぬに、もう鴉が鳴き出した。遙に見える湖や川は、金のやうに夕日に閃（キラ）いて、葛葛（クワクワ）て居る。獲物は葛葛（クワクワ）で四脚を縛つて、大人組が昇いて、とくに還つた。僕等は紅葉の枝を折つて、ぶら／＼後から還つて行く。山を降りて、野に出ると、日は彼方の森に沈んで、夕煙が村々に立ち昇る。と思ふと、薄紫にけふる野末に、大きな月が顔を出す。その月がやゝ高く、やゝ小くなつて、うちつれて歩み行く影の大分短

くなる頃には、僕等はもう塾に歸り著いた。

大胡坐ヒタラクシテ入ラシテ草鞋をぬいで、顔を洗つて、先生はじめ一同大胡坐で、

てんでに兔汁を盛つて、飯を食ふ。この兔汁は別名を

胡蘿蔔

大根、胡蘿蔔、牛蒡、燒豆腐、蒟蒻といふのではあるまい

牛蒡

かと思ふ程、正身は少い。併しその味、否、それよりも食

寝

つてしまつて、著物も更へず、ぐつすり寐る時の心地

殿

は、何ともいへない。夢も見ない。身うごきもしない。翌

朝の九時頃までは、死骸も同然だ。

九 東京遊學を勧める

東京遊學を勧める

此間名古屋の叔父上が上京された時に、君の御

消息をよく聞きました。來年は學校を卒業され

るさうですが、君の御志望では、學校はそれだけ

にしておいて、卒業後すぐに商業界に立たうと

して御いでだといふことを聞きました。

それも一應の考方だと思ひますが、今日はどう

しても専門學の知識が必要ですから、中等程度

の學校を出たばかりでは、まだそれが不十分で、

後に困ることもあるかと思ひます。それにま

た學校を出て、すぐ相當の地位に就かうとする

困

丁稚 捷所

のも、無理で、それだけの知識をもつて、丁稚小僧から仕上げるが肝心です。その方が結局却つて捷徑だと思ひます。
小徑リチカニ
 ともかく、學校教育は高等程度まで受けて置く必要がありません。そこを御一考あつて、是非上京して勉強なさるやうに、御勸申します。
 皆様によろしく。秋になつたので、そちらは紅葉が美しいでせう。

一〇 伊能忠敬の晩學 その一 幸田露伴

(二日一信)

抑嗣

忠敬、十八歳にして出でて伊能氏を嗣ぎ、自ら抑へて敢へて平凡の人となり、一意専心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に、最も美はしく果さんことを期したり。
ハヤヤリニ
ナシケン
一ニシヤウケンタニ
カガメノオノエト
早業リト
決心

竭



伊能忠敬

才氣ある者の常として、己が欲せざることには、一舉手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲することにはのみ身を委ね、心を竭さん

甘

雷

譽 截

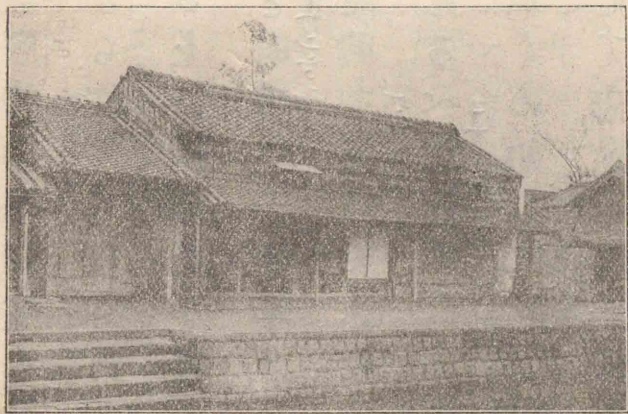
とするは、免れがたき習なり。たとひ己が欲せざるこ
 となりとも、己が爲さざるべからざることなる限、甘
 んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき
 事をなすものは、その人雷に才氣あるのみならず、ま
 た實に徳量ある人なりといふべし。
 世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少
 し。徳無くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刀の肉
 薄きが如し。よく物をば截るべし。折る、虞は免るべ
 からず。されば才子の、奇才を抱きながら成功を見ず
 して、中途に廢する例は、屢見るところなり。忠敬が算

枉

閑
 人莫進
 無用者
 入る

數曆術の學を嗜み、且これを善くすべき資を抱きな
 がら、枉げて自ら市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎた
 る上は、伊能氏を榮えしむべし。といふを唯一の希望
 として、三十餘年の長き歲月の間、孜孜として家運の
 隆興を圖りたるが如きは、實にその徳量の大なるを
 見るべきなり。
 かくの如くにして、忠敬は五十歳に至り、伊能家中興
 して、忠敬が養家に對する人情と義務とは圓滿に果
 され、子景敬家を嗣ぎたれば、忠敬は始めて閑を得て、
 その身を己が自由に用ゐることを得るに至れり。忠

敬のこの時は、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途



家能伊町原佐
(寸存を態舊の時當營經敬忠に門)

多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合も、わが力を試るべき處たり。忠敬は常人が世の務を辭して、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲す

苟

あらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを、歎ずることなかれ。

一一 伊能忠敬の晩學 その二

佐原 今千葉縣香取郡佐原町。
深川 今東京市深川區。

笈

さて忠敬は郷里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一様に笈を負ひて郷關を出で、上國に遊びて、師を尋ね學に就く書生と異なるところは、たゞその若きと老いたるとの差の

み。かくて忠敬はその好める學に身を委ねたるが己が満足し信仰すべき師を得ることは、容易ならざりき。

幸にも當時幕府に曆法改正の擧ありて、算數曆象に精しき高橋東岡、これがために特に大阪より召されたれば、忠敬直ちに訪ひて、東岡と師弟の契を結べり。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なり。普通の人情にては、己れより年若き人に會ひては、たとひ己が學業などその人に及ばずとも、なほ強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下りざるが習なれども、徳量ある

忠敬は、眞に敬ふべき學識ある人に對して拜伏するを、いかでか厭ふべき。東岡もまた意に介せざりしかど、同門下の者らは、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢笑柄となしたりといふ。

晩學の難きは、實にいつれの世にありても、かゝる事情の存するによるなり。是を以て非凡の士にあらざるよりは、自ら恥ぢて、敢へて師に就き學を修むるの勇を缺き、終に空しく志を抱きて、墓穴に入るに至るなり。本來、老いて學ぶは、まことにその志の淺からざるを顯すのみ。また何の不可なるところかあらん。況

是は
顯

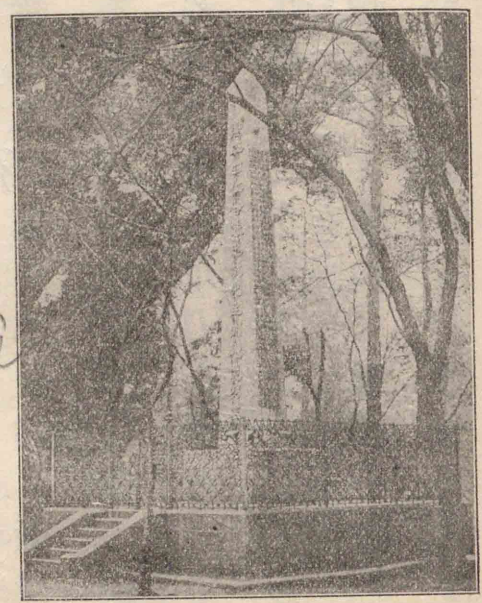
蚊

やまた何の恥づべきところかあらん。思ふに衆人の蚊を聞くこと、忠敬にありては、たゞ蚊蠅の鳴くを聞くが如くなりしなるべきのみ。

蘊 迸 潰

忠敬と他の同門の徒との優劣勝敗は、比較するまでもなく明なり。忠敬の學術は、長堤の決潰して、水の迸流するが如き勢を以て歩を進め、早くも同門下には肩を比すべきものなきに至りて、遂に東岡の學の蘊奥を極めたり。かくて忠敬は幕府に上書して、各地の實測をなさんことを請ひ、命を得て、まづ今の北海道の實測に従事せり。これ忠敬がその學術を世に用る

溢 旺



伊能忠敬先生測量地功表 (山園園公芝市京東)

年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。

一二 肉彈

午後五時
明治三十七年
七月二十七日
のことなり。

齊 硝煙 飛彈 鎖 躍 鼓舞 遣

午後五時は來た。我が全砲兵は一齊に砲火を開き、歩兵も亦全力を舉げて射撃を始めた。天地は忽ち硝煙の雲霧に鎖された。飛彈、爆鳴は山谷を劈かうとするほどであつた。我が歩兵は射ては進み、止つては撃ち、奮進又躍進。小隊長殿と微に響くのは最後の感謝で、あつと叫ぶのは玉の緒の絶る聲。只進め、進んで死ねと、將校は軍刀を揮るつて、戦線を彼方に走り此方驅けて、士氣を鼓舞してゐた。豫備隊であつた二個小隊も、工兵も、亦第一線に増遣された。遂に我が第一大隊は、敵前實に二十米突の近

マタニツカス

屏風 塞 攀

榴霰 派

くまで肉薄したが、前に立ち塞がつてあるのは、屏風のやうな岩山で、殆ど一つの足場もないから、如何にあせつても攀ち登ることが出來ず、側面からは敵彈をばら／＼浴びせかけられる。正面に向かつた第二中隊は、只々敵の機關砲の標的となるばかりで、見る見るばた／＼と仆れる。而して又我が軍の榴霰彈は、花火のやうに空中に破裂しただけで、敵の防禦工事に對しては、殆ど何一つ效力を奏しなかつたやうである。榴霰彈では役に立たぬ。早く榴霰彈を發射してくれ。と、砲兵隊に頻に傳令使を派遣したが、一人として

歸つて來ず、皆途中で仆れた。工兵の小隊長に、爆薬を
 送つて來いと命じたが、それも間に合はなかつた。
 七時も過ぎ、八時、九時ともなつたが、形勢は依然と發
 展せぬ。夜は已に更けた。物凄いな下弦の月は、淡く戰場
 を照らして、陣地の半面を朧に露してゐた。をりしも、
 遙に左翼の方に當つて、ほがらかな君が代の喇叭が
 聞えた。その聲は月影の細い空を傳ひ、餘韻が微に長
 く延いて、予等の腦裏に一しほ深く沁み渡り、恰も陛
 下御親ら前へと號令なさるやうに感ぜられて、將卒
 は皆自然に身をひきしめ、勇氣更に百倍し、忽ち奮躍

松村少佐
 名は安雄。陸
 軍歩兵少佐。

して、彈雨を犯し、岩石を攀ちて、猛進し、大喊聲を放ち
 ながら、敵壘に突入した。眞黒に固まつた一團の先頭
 に立つた松村少佐は、眼を瞋らして叱りつけるやう
 に、

「突き込め、突き込め。」

君が代の喇叭はなほ盛に起る。各隊は續いて、萬歳、萬
 歳を連呼して聲援を與へた。山上には劍尖相撃つて
 火花を散らし、接戦格闘

「これが大和男兒の最後の肉弾だぞ。傲慢無禮のこ
 の仇、今知れ。」

屍 慘 楚 嘯 猛 翻 湧
大白山 旅順の東約三
里にあり。

と、打ち込む太刀筋に、鮮血の河を流し、伏屍の山を築いた。慘は慘だが、艱難苦楚のはてに、やつと敵を撃ち破つた我等の愉快は、如何ばかりであつたらう。海嘯のやうな一團のあとから又一團と我は續々兵力を増加するので、敵は遂に猛烈な攻撃に耐へられず、翌日午前八時、東天に紅を染め出した頃、我が軍は確實に大白山一帯の高地を占領した。軍旗はひらくくと陣頭に翻り、萬歳の聲は潮のやうに湧いた。(肉弾による)

一三 青島入城式 その一 澁川玄耳

巍

併 翼 僚

否

神尾將軍 名は光臣、陸軍中將、青島攻圍軍司令官
山梨參謀長 名は半造、陸軍少將、青島攻圍軍參謀長
若見將軍 名は虎治、陸軍少將。

黃海に南面して、青島政廳が巍然として聳えてゐる。一條の大道は廳の階から直ちに海岸に達し、其の正面に小さい島がある。元來此の島が青島といふ名の持主で、此の島ゆゑに此の灣が青島灣と呼ばれてゐたのであつた。併し今は陸の方が青島となつて、小島の名はアルコナと變つて了つた。政廳の屋頂には今日章旗が翻つてゐる。黃海を、否アルコナ島を背にし、此の日章旗と相對して神尾將軍は馬を立ててゐる。山梨參謀長以下幕僚は其の左翼に馬首を駢べ、右翼に少し離れて侍從武官若見將軍

控

樞

馬場先門外
宮城正門の通
りに當る。

が手綱を控へ、其の右に文官次に從軍記者及び僧侶
が整列してゐる。此の前を東西に走る大路をプリン
ツハインリヒ街といふ。此の地點こそ眞に青島の心
臓ともいわれる樞區で、東京ならば馬場先門外と日
本橋通とを兼ねたやうな所である。

奪

時は大正三年十一月十六日午前十時で、獨逸皇帝が
好口實を見出して、此の青島を強奪してから十八年
目の、而も同じ月である。當時獨逸艦隊司令長官は今
しも吾等が整列してゐる此の海岸に上陸して、三時
間以内に退去せよと、支那の守備隊長に要求し、一兵

岨

に翻らずして占領を遂げ、やがて山東省、支那、東洋に
於ける優越な勢力の根據を作つたのである。此の獨
逸帝國の誇としてゐる、極めてめでたい土地で、神尾
將軍は攻圍軍の分列式を行はうとするのである。

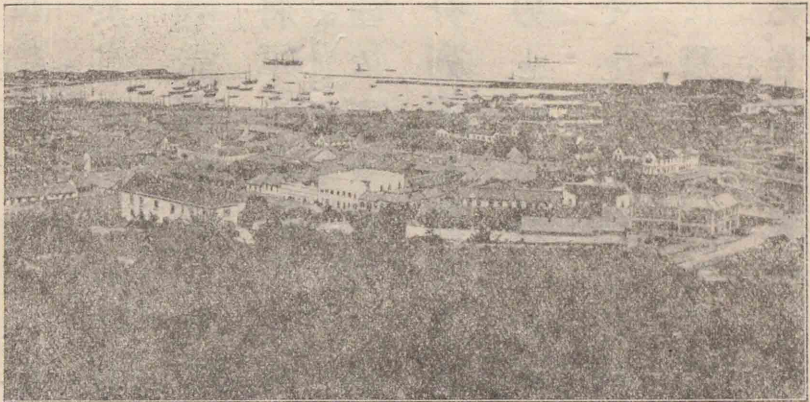
留

三々五々、残留の獨逸人達は路傍に佇んで、日本軍の
分列式を觀ようと待つてゐる。戰爭開始以來、青島の
男といふ男は、殆どすべて兵器を執つて守備に加り、
俘虜として概ね今は俘虜となつて了つた筈で、現在青島

嬉

に殘つてゐる獨逸人は、婦人と小兒とが多いのであ
る。今日の見物に、無心な小兒が嬉々として笑つてゐ

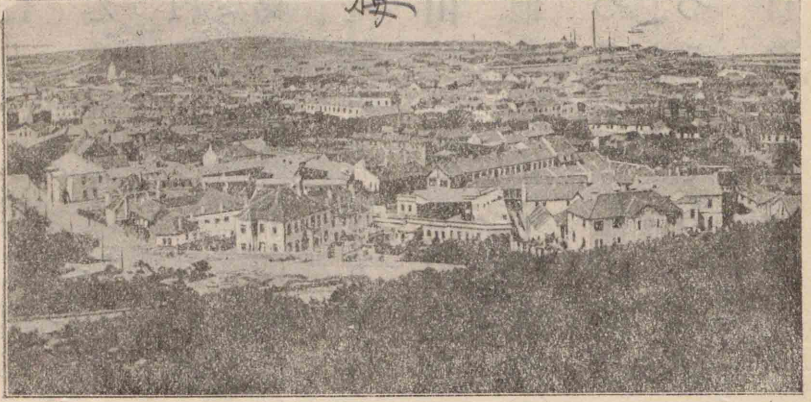
姉 煙管 餘所事 奴



青島市
 る。待ちあぐんでは騒ぎまはつてゐる。此の幾月、恐ろしく寂しかった街に俄に多くの人が入つて来るのだから、子供達には嬉しいことに違ない。母や姉や老人達には、聲をひそめて叱つてゐるのもある。或は賤い商人などであらう、くはへ煙管で、餘所事の様にくらゝく歩く奴もある。窓の内、屋根の上などが

ポンペイ
 昔火山の噴火にあひて灰に埋められ、久しく地底にありし町。今アイタリヤにあり。

大厦高樓



街
 ら眺めてゐる者もある。獨逸人の中には支那人も雜つてゐるが、此の廣い街、繁華の中心である大通りに、見渡したところ見物人がすべて百人とは無い。兩側の大夏高樓、皆戸が鎖されてある。予はポンペイの町、一地の底から掘出された死の町に立つてゐる様な氣もした。併しそれは予が獨逸勢力の消

概 杓 這 濺 隱 檫 楸 楓

長といふ様な事を考へるからであらう。目の當り見
える青島はむしろ陽氣に裝飾されてある。屋根は概
ね赤がちな瓦に掩はれ、壁は黄色、椽色、白色が多い。蔦
葛が裝飾的に塀にも這はせてある。それが今丁度朱
を濺いだやうである。十八年來の努力空しからず、山
山には松も稍長じて、山骨を隠すまでになつた。其の
他、落葉松、栗、檫、楸、銀杏、アカシヤ、楓の類も皆能く育
つてゐる。此の頃の砲火の中にも既に幾度か霜が降
つたのであらう、遠く近く、濃く濃く彩られてゐる。利
口な獨逸人は、祖國の爲に死ぬのを惜しんで、命大事

沙=砂

脆 嶼 沙 媚 評

と脆くも降伏して了つたが、山も野も街も血を塗つ
た様な青島の初冬は、紅葉の勝區として、日本にも得
易からぬ眺である。況や青島半島は對岸の海西半島
と相對し、幾つかの島嶼が其の間に散らばつて、山の
姿は尋常でなく、汀の沙もきよらかで、風光の明媚な
のは、他に類を求め難い。一言に評し去ると、青島は別
莊地の光景である。商港とか首府とかいふ趣は甚だ
乏しい。

一四 青島入城式 その二

喇叭 遠く喇叭の音が起つた。待ち構へた人々の氣が一時
 緋 網を控へる。軍馬も皆勇むのであらう、神尾將軍以下手
 揺 網を控へる。山梨參謀長の馬が頻に尾を振る。其の隣
 翔 其參謀の爪白の馬が、小招するやうに前脚を揺か
 聳 ず。
 蹄 朝から曇つて、一時は少し降つた空が、がらりと霽れ
 憂 て、市街が麗に照り輝く。喇叭が次第に近くなる。蹄の
 寂 音が憂々と響く。其の時先頭の一將校がかけた凜と
 寞 した號令が、今まで引締つてゐた寂寞を破る。折から
 プロペラーの音高く、頭上の空に飛行機が翔つて來

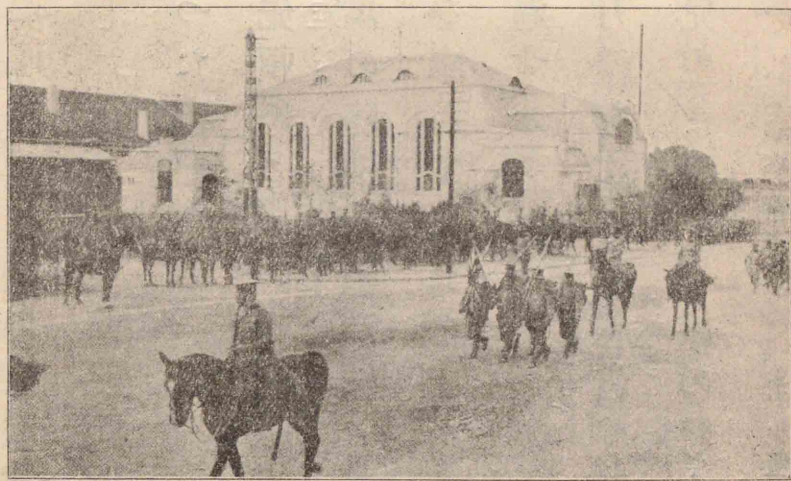
十年前
 明治三十八年
 のこと。

堀内少將
 名は文次郎、
 陸軍少將。
 大村旅團
 歩兵第二十三
 旅團、司令部
 は長崎縣東彼
 杵郡西大村に
 あり。

退去 た、嗚呼、飛行機の入城式、思へば時代は急速な進歩を
 した。嘗て十年前旅順開城の折には夢にも想はなかつた事である。
 先頭についで喇叭手の一隊が通過し、其の後に乗馬の將校が數騎續いて現れた。堀内少將が大村旅團を率ゐて來たのである。足竝正しく、司令官の前を通過するとき、つと馬首を廻して司令官の右に出て、刀禮を施して報告する。其の立派な英姿を見ては、男兒生まれで一旅の將とならば、また以て瞑すべしといふ感が起つた。まして今日此の處で、東亞の歴史に

總

頓



青島入城式

いつまでも遺る光輝ある
 入城式を行ひ、幾萬といふ
 貔貅の敬禮を受ける神尾
 將軍の榮譽となると、人生
 の快事はこゝに極ると謂
 つてよい。當事者は傍觀者
 より却つて無頓著なこと
 もある。此の時神尾中將は
 どんな感想を懐いてゐら
 れるであらう。表情の乏し

髭

絞

擔

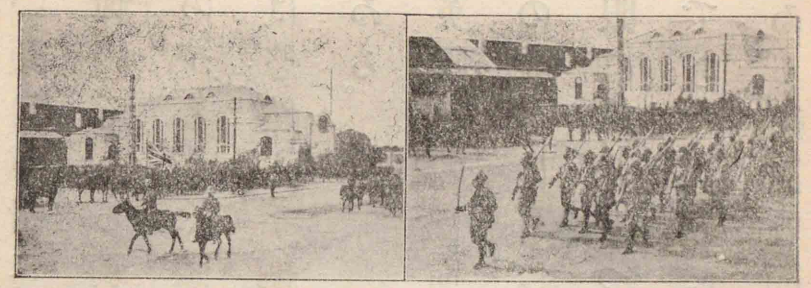
髮 赭 妻

い顔は、遠目には一層物さびしく、白い髭のみが日に
 輝いてゐる。騎つたのは逞しい赤栗毛、二白で流星な
 のが著しく眼に著く。出よう、出ようとするのを、將軍
 は悠然と手綱を絞りながら、いつも同じ路上を視て
 る。

英國兵の行進は多大の興味を以て迎へられた。英語
 の號令は耳に珍しく、左の肩に銃を擔いでゐるのは、
 眼に珍しかつた。異彩を放つたのは、其の中の印度兵
 であつた。頭には國俗に隨つて、丈餘の布帛を捲いて
 る。赭黒い顔の大部分が漆黒な髻に蔽はれて、妻

亞弗利加
歐羅巴
貌

屈



城入の軍英

城入の兵度印軍英

い。亞弗利加種の黒人とは違ひ、歐羅
 巴人と同祖だから、骨格、相貌は十分
 の威容を備へ、身長は英人より高い。
 如何にも倔强に見える。
 動作の器械的に整齊して見られる
 のは、天下に獨逸兵に過ぎるものは
 あるまい。此の點には、日本軍とても
 一步を譲るやうに思はれるが、其の
 意氣の充實してゐるのは、我が軍を
 第一に置くことができよう。特に今

脱帽

関

愧

衝

日の分列式で予は然う感じた。
 破れた軍旗の通るとき、予は脱帽しながら何となく
 感に迫つて、きまりが悪いほど、ほろ／＼と涙を流し
 た。其の次に通つた新しい軍旗に敬禮する時も、やは
 り泣かすにはゐられなかつた。或時は又、行進する兵
 士の、^{カウセツ}旗みかへつて、^{モウケン}関兵官に一所懸命注視の禮をし
 ながら、通過するのにも、ほろりとなつて堪へられな
 かつた。予は自己の感情的なことを愧ぢながら、後に
 他の人と此の事を語り合つてみると、案外にも同じ
 衝動を受けて落涙したものが少くなかつた。

一五 白耳義の落人

杉村楚人冠

リエージュ
ベルギー東部の都會。大正三年八月十日獨逸軍に占領せらる。
ブリュッセル
ベルギーの中部にあるその首府。大正三年八月二十日陷落。
アントワープ
ベルギー北部の港市。大正三年十月九日陷落。

白耳義の民は、獨逸兵の言はうやうない暴戾殘虐に
おぞ毛を振るつて、誰一人安んじて本國に踏み止ら
うといふ者はない。リエージュが落ち、ブリュッセルが敵
の手に入つた頃から、そろくくと難を避けて、諸方に
落ち延びたものだが、アントワープの落ちる前後に
なつては、さながら潮の寄せがやうに、我一と和蘭
佛蘭西、英吉利を指して本國を逃げ出した。
陸續きの和蘭、佛蘭西に行く者は、姑く措いて、英國に

逃げて來る者の爲には、其筋でも出來る限の便船を
用意して、貧富の別なく、無料で渡航させようと試た
が、何分一時に何千、何萬といふ人數を、僅な船で、如何
ともすることが出來ない。船といふ船はぎつしりと
人で詰つて、丸で身動きもならぬ。やつと一艘出る。後
の船がまた直一杯になる。乗り損つた幾萬の老若男
女は、著の身著の儘で、遙に傳る砲火の聲を聞きなが
ら、二夜も三夜も波止場に立ち盡くした。其のうちに
は老人が病み煩ふ。子供が空腹に泣き喚く。其の上を、
無情な獨逸の飛行機が飛び廻るので、氣の弱い者は、

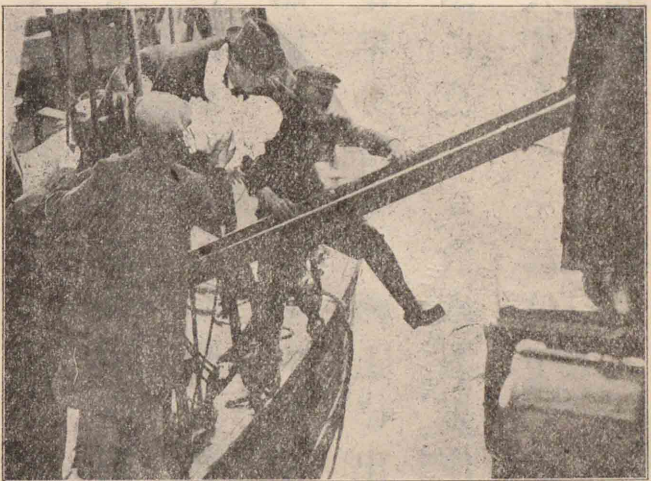
其處にも此處にも氣絶する。泣くにも泣かれぬ騒で
ある。それやこれやで、船の發着が丸で定まつてゐな
い。

中にはまた、一刻も早く危険を脱したいとあせる一
念から、小な漁船やヨットを仕立てて、漕ぎ出して來る
のが澤山ある。いくら海峽の狭い間だとして、あの潮流
の急な、浪の高い中を、雨には打たれ次第、潮には揉ま
れ次第で、やつて來る。オスタンドから此のフークス
トンまで、廿餘時間中、一片の麵包も食はず、片時も横
になつて眠ることは出來ず、陸に上つた時はひよる

オスタンド
ベルギーの西
北部、北海に
臨める港市。
大正三年十月
十五日陥落。
フークス
トン
ロンドンの東
南七十哩許に
ある海港。

ひよるになつて、歩行も自由でない者が、屢見受けら
れた。

十五日の正午に著いた汽船ケニルウガース號のやう
なのは、能くこれで航海が出來て來たと、觀る者に手
に汗を握らせた。此の船が棧橋に著いたのを見ると、
船底に積荷がない爲、船足が浮き上つて、後の推進機
が半分ほど水の上に出てる。それでゐて、甲板は言
ふに及ばず、倉庫、石炭庫などいふ船の上部は、一杯の
人である。それ位ではすまない。甲板の上に吊るした
端艇の中にさへ、人がうぢやくとゐる。定員千五百



白耳義最の後落人
(オスタンド船に子供で梯子をか場止波のドンタスカ)

名といふ所を調べて見ると二千二百六十三人あつた。こんなに頭だけ重くなつた船を、能く顛覆もさせずに、此處まで御して來た、船長の手腕は驚かれると、人は皆舌を卷いた。

かう大勢が詰め込んだのだから、オスタンドを出てから十七八時間、一同は食はず飲まずは愚か、眠もす

わりも身動も出來ない。全く正真正銘に立ち盡くしたのである。著港早々港務部にあてた船長の第一の報告が、飲料水皆無といふのであつた。乗客は大部分百姓で、其のまた大部分が女と子供とであつた。此等が石炭に汚れて、雨に濡れそぼちながら、甲板の上に慄へて居る様は、二目と見られた光景でない。これがオスタンドを出た最終の船であつたといふ。

一六 勇士の行くて 幸田露伴

命をふくみて勇士出で、

馬ウマをうたする朝アサまだき、

胡天三月春寒くして、

風カゼに骨ハネあり、雪ユキに聲コエあり。

小手テをかざして見ミやる彼方カノカタに、

白雲シラクモこむる空ソラはを暗カクく、

鐘カネ踏フミみしめ、たくを追オウふ路ミチ、

鐵蹄テツキすべる氷危ヒヤシし。

さもあらばあれ、さもあらばあれ、

人ヒトに意氣イキあり、馬ウマに驛イキあり。

風カゼたゞみだす、馬ウマのたてがみ、

雪ユキたゞくるふ、人ヒトの眼メの前マエ。

命イデをふくみて、馬ウマをうたする

勇士ユウシの行イく、風雪フユキもなし。

一七 地震の前兆 細川潤次郎

嘉永、安政の頃、麻布アサヒあたりに金剛大夫キウゴウダイフといふ能役者ノビヤクシャ

あり。鼓打カネウチつわざは更マシにも言イはず、よるづの樂器ガクに通ス

じて、調子テウジを聞キき分ワくること、いと妙タカウなりき。ある日、鼓

足利義満 應永年間 觀世阿彌

嘉永、安政 共に約六十年 前の年號。 麻布 今の東京市麻 布區。

の調子常にかはりければ、不思議の事なりとて、餘の
 樂器を鳴らし、また餘人にもせさせて之を聞くに、初
 の如くなりければ、處によりて變ることカワルトモアルデアモト思もやあらん
 と思ひ、家の外にて試たれど、猶同じ調子にきこゆる
 にぞ、是必ず非常の天變あるべき前兆なるべしと思
 ひ、家内の者に命じ、庭の片隅にあらゆる器具を運ば
 せ置き、指圖次第に彼處に集るべし。といふ。之を見聞
 する人々、金剛大夫は狂氣せしにやあらんなど、つふ
 やきけるが、三日を出でぬ内に大地ゆるぎ出し、家屋
 崩れ、老幼男女うたれて死するもの幾萬人といふ數

伏見
 今の京都府綴
 喜郡伏見町。
 京都市を南へ
 距る一里餘。
 愛宕
 京都の西北方
 にあり。

を知らず。是ぞ安政二年十月二日の江戸大地震なり
 ける。此の時、金剛大夫は家に死傷者なく、器具も損ぜ
 ずして、あたりの人に羨まれたりといふ。音律の空氣
 に關係あるは言ふまでもなし。地震も空氣に關係あ
 るべければ、樂器の調子に由りて大地震を前知した
 るは、怪しむべきことにはあらかじきし。
 昔豊太閤の時、森本檢校といふ者、音律に妙なりしが、
 律の調子の常にかはりたるを疑ひ、伏見より京都に
 上りたるに、其の調子猶善からぬ故、愛宕に往きて試
 けれども、猶かはりなければ、是吾が身の上の事なら

んと思ひ、深く悲しみ居たりけるが、其の夜、大地ゆるぎいだし、愛宕の山崩れて、家を倒し、檢校死したりき。是伏見大地震の日の事の由なり。

金剛大夫と森本檢校と、音律に由りて地震を前知したることは同じけれども、吉凶禍福は同じからず。

一八 震害地より

御見舞の電報ありがたう。いづれもつと落ち付いてから、委しい手紙をあげる事にして、今日は取敢へず大體の事を御知らせします。

地震のあつた十三日は非常によく晴れた、少し蒸し暑い日でした。午後三時頃、私達は學校から休暇で歸つて來て居る弟を中心にして、お八つを食べて居ました。皆で冗談を言つて賑やかに笑つて居ると、不意にどしんと音がして、からだがぐらくとしました。地震と誰言ふとなく言つて、一同が立たうとすると、又ぐらくと家が搖れたやうで、弟がいきなりそこに倒れてしまひました。すると、近所から突然ひどい悲鳴が聞えて來たので、一同が心底から、大變な事の起つ

た事を感じました。

ツライ、マニ、少シ、向は、

咄嗟ツライの間に私は末の妹を引かへて、家を飛び出しますと、母も弟も父も續いて出て來ました。私達は走つて裏の竹藪に逃げ込んだのです。すると、何處かでめりくと大きい木の折れる音がしました。子供達は泣き出すし、一同の心にも、以前の大地震の時の事が思ひ出されて、誰も一言も口をモウコきくものがありませんでした。あとで聞くと、近所の農家で、十五六軒は半ば壊れたのがあるといふ事ですが、私の家では、屋根

の瓦が少し落ちた位ですみました。今では多少笑話も出來ますが、その時には、全くどうなる事かと思ひました。右のやうですから、まづ大体御安心下さいませ。去かし今でも何となく不安心に思はれるところもありません。只今當地ではその事の噂ばかりです。東京の皆様によろしく。別に手紙を書きませぬから、あなたから御傳へを願ひます。草々。

(二日一信)

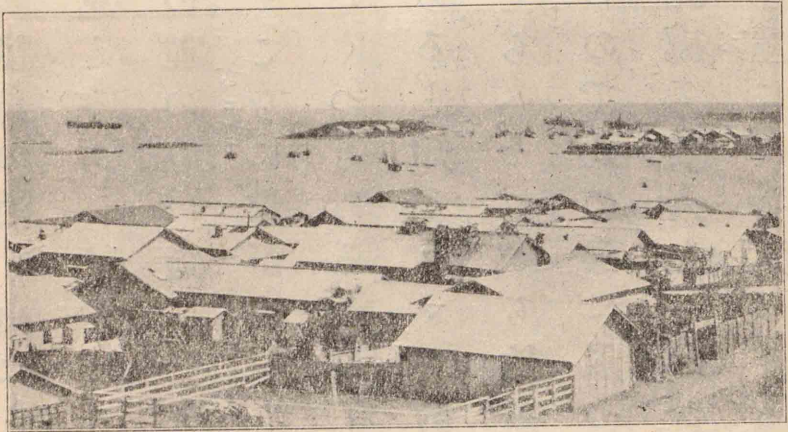
一九 根室の冬

河東碧梧桐

今朝は今年始めての寒さだと、誰も口々に言ふ。
比白ノ者カ同ヤニイテ
寒暖計が華氏で一度四分、攝氏で零下十七度であつたさうな。

午後、根室灣の氷を見に行く。海が凍るなどといふことは、遠いく、世界のはづれの國の話とばかり思つてをつたのが、今其の有様を此の目にも睹、此の足にも踏むのだと思ふと、聊モトメか好奇心にも驅られる。

此處が浪打際だといふ處には、夥しい雪の塊ツミが土手



根 室 港

を築いた様になつてをる。それを越えれば、もう海であるといふが、ざくくした浅雪が凍りついてをつて、大地の雪を踏むと、さして變りはない。向かうを見、左右を見渡すと、一望たゞ眞白な雪で、目の及ぶ限は平たい。平たい左のはてに、眞白な峰が二つ三つ並んで立つてをる。あれは

國後島の泊り山だといふ。右のはてにも低く逸峰が見える。あれは、やはり國後の羅白山だといふ。羅白山の麓の方に、遙に一人の人影が眞黒に動いてをる。そこらに筵がけをした、ぞんざいな小屋めいた物がいくつもある。かねて聞き及んだコマイ釣の小屋である。と知る。コマイ釣といふのは、氷を切つて穴をこしらへ、それから釣糸を垂れて、コマイといふ魚を釣るので、此の邊に限つた冬の漁獵である。夜になつて、此處で焚火をしながら、釣糸を下す。晝間である爲か、小屋には番人のをる氣色もない。小屋を覗いては、段

段沖の方へ出て行く。君、大丈夫かい。などと、同行者のうちに言ふ者もある。

鋸で氷を挽いてをる男がある。何にするか。と問ふと、こゝから網を下げて、魚を待つのである。と答へる。

「氷の厚さはどの位か。」と聞くと、其處に今切つたばかりなのがある。といふ。成程、大きな賽（双六サイ）の形をしたのが二つ三つころがしてある。厚さは四尺五寸もあらう。何處が雪と氷との境ともわかずに、濁つた磨硝子色をしてをる。

氷を渡つて來る北風の寒さは、何とも形容が出来ぬ。

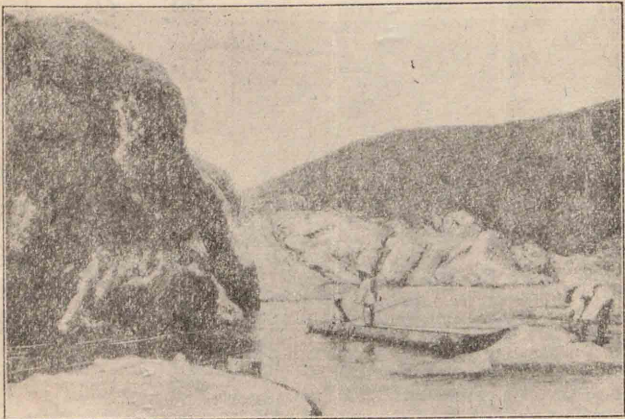
無形カクシテの剃刃テトウが敏捷ビシクに顔の上を閃ヒラく思である。首卷カネマキもせず、髭ヒゲを眞白マシロに凍コらしてをる。隅スミから隅スミまで澄スみきつた空ソラを改カめて仰ウツいで見る。斯カ様な穩ユキな日ヒでさへも、又更に寒サムさを感じるのであつた。

二〇 北海道道の紅葉

角田浩々

北海道の冬季は、白乾坤チキョウケンなり。知人チジンよりの來報ライホウに「我が雪國ユキクニの乾坤チキョウケンは、君キミが去サつて後ノチ、局面キョクメン一變イツペン、恰タラシも水晶世界スイセイセカイとなり、滿目マンモク唯白タラシク皚ハル々ハルハル。去サかも枯林コリンに咲ハける雪花ユキハの壯タカシ觀ミに至いたりては、一段イツタンの風趣フウソ、何ナニの辭コトを以もつてか報ヒトコトずべき。」

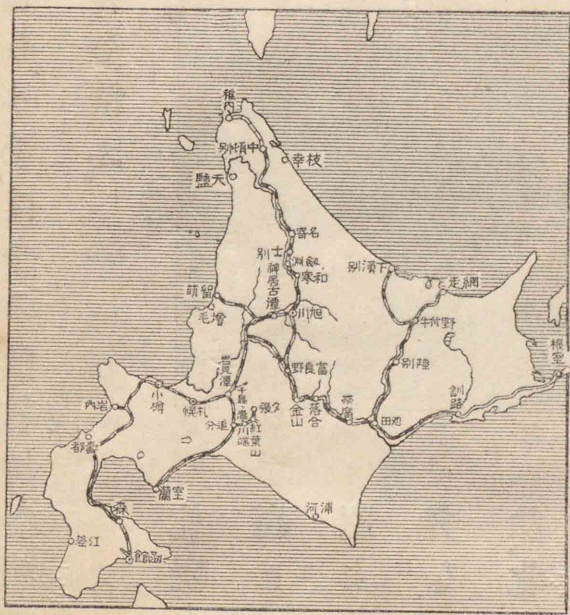
とあり。予オレは今の白乾坤チキョウケンを想望カガエテモテしながら、昨キノの紅黃ベニキナンド世界セカイを懷オモふ。



神居古潭

札幌サッポロより旭川アスカガハに至いたる道ミチに名高ナカき神居古潭カミイコタンはあり。汽車キョウシャの窓マダラより飛泉トビイミ、奇岩キイワン、碧流ヘキリウ、紅葉ベニキナンドの美ウツクシを瞰カミ下シし得エ。その道程ミチノセ一里イツリ餘ヨリ、北海道鐵道ホクไกョウテツドウの沿線エツセンに於おける絶勝ツツシヨウたり。予オレは前に九月三日クニノカミノヨリ十日トウジツ之ノを過スぎ、後に十月五日トウジツノイタチノカミの午後六時キヨウノチノムシロ再過サヘトスす。再過サヘトスは正

には夕陽ユウガク黄葉コナハの時、江流カキカク杳然ヨウゼン危橋キキョウと對岸タイガンの一路イチロとほ
 の白ホシく見え、山峽サンキョウに夕陽タチカ太陽残りて、昏黄コンワウの色イロ、谷ヤを罩カサシめ、人
 家に焚タチく火ヒの煙ケムリ、歸雲キクモの如ニくたなひき、板葺屋根イタダキヤネの下



に人の足見ゆ。高きを
 馳ハせて低ヒきを見る氣キ
 味アジ、杳ヨウにして深フカし。
 旭川アサヒガハより北方ホクポウ名寄ナヨリに
 至いたる間ま、和寒ワサムイ、劍淵ケンエン、士別シベツ
 の邊へ、旭川アサヒガハより釧路クニロに
 至いたる間まの富良野フラムノ、金山カナヤマ

落合リクアヘの諸驛シヨウエキ、池田イケダ、陸別間リクベツマ、追分オヅヱ、夕張間ユウサマは汽車キョウシャの兩方リウホウ、山
 皆みな深林フカキリノ、林ノ皆紅黄ベニキナ、寥廓リョウカクなる碧天アヲソラと澄清テイセイの灑氣サイキとに渲シ
 染シメの妙タマシを極タマシむ。秋の北海道ホクポウダウ旅行者リョウキョウシャは、何人ナニトモも極彩色キョクサイシキの
 幔幕マンモクを張ヒりたる中なかを歩アむ心地ココロせん。

金山カナヤマは富士製紙會社フジセキカクシヤ第六工場ダイロクコウジョウの所在地ソコノチ、空知川ソウチガハの溪
 流リウに臨ミめる林ノ、樾ツツミは楓樹カエデ多オホクく、林間ノに瓦棟板扉イハヒの隱見カクレミ
 せると、紅黄色彩ベニキナシキの繚亂リョウランせるとは、殊オトナリに旅客リョウキョクを歡ウレばす。
 内地鐵路ノチチテリクの沿線ヨウセンにも斯様ソウヤウの林木ノ、溪流ケツリウ無ナきにあらず、
 斯様ソウヤウの林木ノの美ウツクシと斯様ソウヤウの溪流ノの美ウツクシとの、絶トえて塵土チリ
 の氣キ無ナき天地チノチに相契アハりたる風景フウケイ、鮮アツクきなり。

追分夕張間の線路は、川端より紅葉山に至る邊、汽車は夕張川の岸を馳せて、山々水々を眺む。川の瀬をなし崖を落つる處に千鳥瀧あり。二十分許の間、人は唯紅葉黄樹の美觀に酔はざるを得ず。千山萬壑、名狀指點に違あらず。京の嵐山を知るものは、此に嵐山の春を笑はんとす。

予が過ぎたる時は、神居古潭を經しと同じく夕暮にして、新月恰も溪流の白き、林木の紅黄なる、山上に出で、纖々の光かすかに車窓を覗ふ。同車の鐵道院技師は聲を發して、絶勝を叫ぶ。予は之を感ずることは先

なりしなるべけれども、之を叫ぶことは工業家に後れたり。

予は内地にありて、斯かる紅葉美を見しことなく、また斯かる紅葉美を映發せしむる瀨氣の澄清を吸へることなし。秋の北海道はオゾンの供給地にして、龍田姫の王國たり。

二一 歳暮

中邨 秋香

霰たばしり、風荒れて、
人足しげき八街に、

門松門松ひさぐひさぐ聲すなり。
 ことしも今年やがて暮れんとや、
 暮れんとや。

花にやどれる春の鳥、
 千草千草に眠る秋の蝶、
 結びもとめぬ夢のまに、
 はや一年は過ぎにけり、
 過ぎにけり。

書讀む窓の夜の雪

闇は照らさで、いたづらに
 頭にのみや積るべき。
 たゆまず學べ、時の間も、
 時の間も。

二二 御講書始の記

細川潤次郎

年の始、宮中に於て御講書始の儀を行はる。其の日は
 一月の六日または七日なり。其の前、宮内大臣より三
 人の講者に和漢洋の書籍を進講すべき旨を傳ふ。講

者は其の書籍につきて進講すべき處を選び、書の名と章の名とを記して、内事課に送る。豫め御覽あらせらるべき御本を備へん爲なり。若し洋書西洋書にて譯本なきものならば、新に譯本を作りて、内事課に送る。定まりたる日時いたりぬれば、講者は通常禮服にて参内す。屬官導きて休憩の室に入る。午前十時に近くなる頃、鳳凰の御間に入り、北面して椅子に著く。宮内官の聴講者も左右の椅子に著く。かくて主上は皇后と共に出御あらせらる。男官女官扈從す。一同起立、磬折して迎へ奉る。主上は南面して玉座天座に著き給ひ、皇

后は其の左の御座に著き給ふ。首座の講者起ちて御前の卓の此方なる椅子に著き、携へたる書を卓の上に置き、卷を開きて之を講ず。講じ畢ふれば、起ちて元の椅子に著く。次の講者之に代る。第三の講者講じ畢ふれば、兩陛下起たせ給ふ。男官女官扈從すること初の如し。一同起立、磬折して送り奉る。講者は元の休憩室に入る。こゝにて酒饌酒饌を賜はり、再び書記官の室に立寄り、恩賜の絹を拜受して退出す。抑此の御講書始の儀は、江家次第、公事根源などいへる書に見えず。それより前の書には猶更の事なり。年

老いたる宮内官の言ふ所に據れば、古くより此の儀ありし由なり。想ふに内々にて行ひ給へることならん。何の記録にも見えざるは之が爲なるべし。明治聖代に至りては、新年の御儀式の一つとなれり。其の始は明治二年若しくは三年の頃なれども、果して二年なるか、はた三年なるかは、詳ならず。御記録の回祿にかゝりたればなり。余は明治二十九年より講者の一人となり、親しく此の御儀式に與りし故、御儀式の様、まゝと其の起源とをかいつけて、朝廷の文教を重んじ給へる一端を、後の世に傳ふるになん。

二三 中江藤樹

橘 南 谿

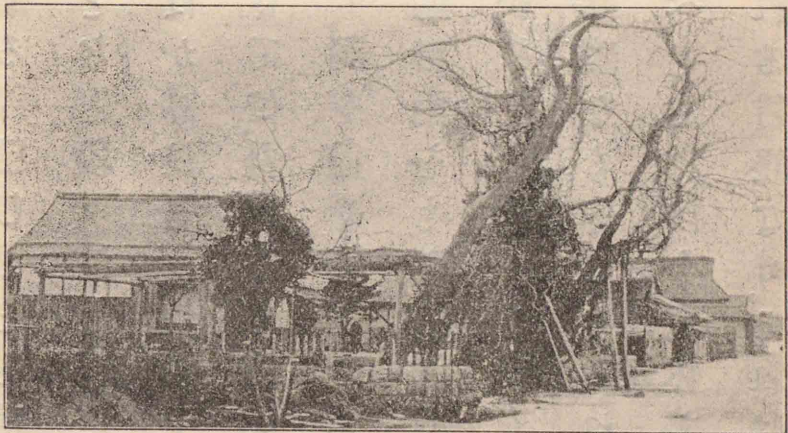
寛永の頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に泊りぬ。馬方は、河原市に歸り、馬を洗はんとて、鞍を解きたるに、鞍の下より財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。馬方大いに驚き、今の飛脚の取忘れたるにこそ。と思ひ、そのまゝ、榎木に走り行きて、飛脚の宿に到り、對面して委しく尋ね問ふに、相違無ければ、その金を取出して返しけり。

寛永
二百數十年前
の年號。
河原市
滋賀縣高島郡
にあり。
榎木
同縣滋賀郡に
あり。

飛脚は死したる者のよみがへりたることちして、喜
 のあまり、行李より別の金子十五兩を取出して、馬方
 に與へ、もしこの二百兩なくば、己が一命を失ふのみ
 ならず、親兄弟までも重き罪に到らん。されば、その
 恩なかく、言葉のいひ盡くすべきにあらねども、ま
 づ當座の御禮までに贈り奉る。と、涙を流して喜ぶ。馬
 方大いに驚きたる顔色にて、そなたの金をそなたに
 取り納め給ふに、何の禮いふことあるべき。とて、手
 だに觸れず。

色々にこしらへいへども、更に受けずして、歸らんと

する故、已むことを得ず、十兩に減じ、五兩となし、三兩
 となし、段々減じて、終には金二步となし、せめてこれ
 ばかりは吾が悦のしるしなれば、受け給ふべし。さな
 くては、吾が心も濟まず、今宵も寐れ難し。と理を盡く
 し、詞を盡くしていふに、この金を受くる程ならば、
 二百兩をも留め置くべし。かく返し奉るからには、聊
 かにても謝禮を受くるは吾が心にあらず。さりとして
 餘義なく仰せらるれば、さらば、鳥目二百文を賜はる
 べし。これは、今夜休むべき所を、これまで追ひかけ來
 れる賃錢なり。これは吾が取るべき錢なれば、申し請



(川小字大村柳青郡島高縣賀滋)院書樹藤

くべし。といひ、さてその二百
文にて酒を買ひて、その人に
振舞ひ、己れも酔ふほど飲み、
やがて歸らんとす。
飛脚は感に堪へかれ、さるに
ても、そこはいかなる人にて
おはする。と問ふに、名ある者
にあらず、又何一つ知れる者
にあらず。只吾が所在所の近所
に小川村といふ處あり。この

村に與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふ
ことをす。某も折々行きて聞き候ふに、「親には孝を盡
くすべし。主人は大切にすべきものなり。人の物は取
らぬものなり。無理非道は行ふべからず。」などいふこ
と、常に語り給ふにより、今日の金子も、吾が物にあら
ざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり。」と
いひすてて、歸りぬ。與右衛門とは中江藤樹先生のこ
となり。

飛脚はそれより京に上りて、いつもの宿に到り、さて
もこの度は辛ツライき命生き延びて、各方にも對面するこ

熊澤治郎八
名は伯繼、字
は了介、蕃山
と號す。

ととなりぬ。とて、ありし次第を委しく語りけり。折節
その家の裏に熊澤治郎八、田舎より上り居て、學問修
行の最中なりしが、この物語を聞きて、その人こそ誠
の儒孔子故云といふものなれ。とて、
その翌日すぐに江州に赴
き、小川村を尋ねて、隨從を
願はれしに、人に教ふる程
の學徳なし。とて、更に許し



熊澤蕃山

蕃山自署

給はず。熊澤ひ林に願ひて、二日が間、先生の門に
佇みて歸らず。先生の老母氣の毒がり、ともかくも内

備前侯
池田光政。備
前岡山藩主。

藤樹が伊豫大
洲藩の執政佃
氏に上れるも
の。

に入れ申せ。とありしかば、いなみ難くて内に入れ、遂
に師弟の契約ギョウをせられけりとぞ。
その後、先生を備前侯の招き給へる時、己れば病身な
りとして固く辭し、門人熊澤といふ者あり、御役にも立
つべき者なり。とて、熊澤を出されけり。いづれも格別
のことなり。

二四 陳情書

中江藤樹

今度私御暇の義言上被成被下候へと奉願候に
つきて、種々御意見の段、忝く奉存候。此中も申上

参内 参上 参下 参出

候如く、一には何れも御存じの如く、二三年前

より病氣に罷成候て、次

第に人なみの御奉公難

儀に奉存候。一には故郷

の母十年以來ひとり住

を仕り罷在候。私の外に



中江藤樹

別に母をばごくみ申すべき子も無御座又はよ

すがに頼み存すべきほどの能き親類も無御座

候故、四五年以前より、漸く飢寒に及ぶ體に御座

候間、此地につれこし申すべしと奉存、去々年御

願申上げ、迎に参り候處、もはや年罷寄り又は病

者に御座候て、里の内をも自由にあるき申事不

罷成體に御座候。其上女の義に御座候へば、故郷

をはなれ、遠國に参り候事、たとひうゑ死仕候て

も成申まじき旨申候故、是非に及ばずすて置き

罷歸り候。私義親は養親共四人迄御座候へども、

三人には幼少にてはなれ申し、今母一人残り申

候。母一人子一人の事に御座候其上、母存生の内

も今八九年の體に御座候條、御暇申請、故郷に

罷歸り、母存命の間は、如何様のわざなりとも仕

y. Nakamura

り、養ひ申度奉存候。母相果て候後、召しかへされ
 被下候はば、御奉公仕度覺悟に御座候。此外、聊か
 存ずる子細も無御座候。斯様になげき申す所、御
 聽届被成候て、不便に思召候はば、能き様に御取
 りつくろひ被成、きこしめしあやまりの無御座
 様に被仰上、御暇被下候様に奉頼外、無他事候。恐
 惶謹言。(原文節略)

二五 私の母

夏目漱石

私は母の記念の爲に、何か書いて置きたいと思ふが、

生憎私の知つてゐる母は、私の頭に、大した材料を遺
 して行つてくれなかつた。

母の名は千枝といつた。私は今でも此の千枝といふ
 言葉を懐かしいものの一つに數へてゐる。だから私
 には、それがたゞ私の母だけの名前で、決して外の女
 の名前であつてはならない様な氣がする。幸に私は
 まだ母以外の千枝といふ女に出會つた事がない。

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今
 遠くから呼び起す母の幻像は、記憶の絲をいくら辿
 つて行つても、お婆さんに見える。晩年に生まれた私

は、遂に母のみづくしい姿を覺えずにしまつたのである。

私の知つてゐる母は、常に大きな眼鏡を掛けて裁縫をしてゐた。其の眼鏡は鐵縁の古風なもので、玉の大きさが直径二寸以上もあつたやうに思はれる。母はそれを掛けた儘、すこし頤を襟元へ引き付けながら、私を凝と見る事が屢あつたが、老眼の性質を知らない其頃の私には、それがたゞ母の癖とのみ考へられた。私は此の眼鏡と共に、何時でも母の背景になつてゐた一間の襖を想ひ出す。古びた貼交ぜの中にあつ

た、生死事大無常迅速云々と書いた石摺なども、鮮に眼に浮かんで来る。

夏になると、母は始終紺無地の縞の帷子を著て、幅の狭い黒縹子の帯を締めてゐた。不思議な事に、私の記憶に残つてゐる母の姿は、何時でも此の眞夏の服装で頭の中に現れるだけなので、それから紺無地の縞の著物と幅の狭い黒縹子の帯とを取り除くと、後に残るものは、たゞ母の顔ばかりになる。母が嘗て縁鼻へ出て、兄と碁を打つてゐた様子などは、この二人を組み合はせた圖柄として、私の胸に收めてある唯一

の記念^{メモ}なのだ、其處でも母は矢張同じ帷子を著て、同じ帯を締めて坐つてゐるのである。

母が父の所に嫁にくる迄、御殿奉公をしてゐたといふ話も、穢氣^{ケガレ}に覺えてゐるが、何處の大名の屋敷に上つて、どの位長く勤めてゐたものか、御殿奉公の性質^{モトナリ}すら能く辨へない今の私には、たゞ淡い薫^{カミ}を残して消えた香のやうなもので、殆ど取り留めやうのない事實である。

然し、さういへば、錦繪^{キムシヨウ}に描いてある御殿女中が羽織つてゐるやうな、華美な總模様の著物を、宅の藏の中

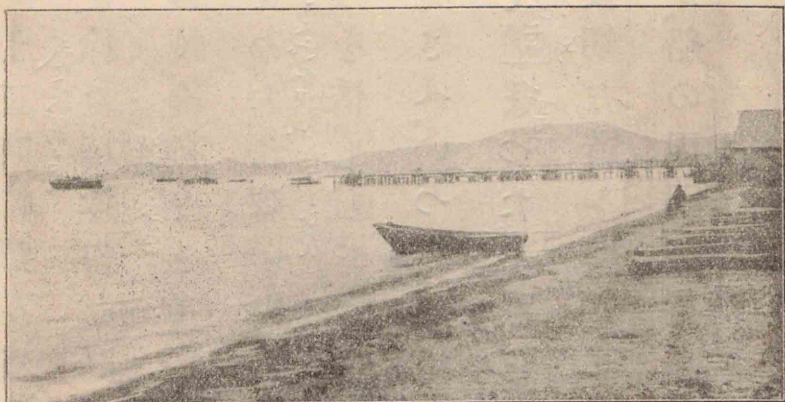
で見た事がある。紅絹裏^{ベニヌ}を付けた其の著物の表には、櫻だか梅だかが一面に染め出されて、處々に金絲や銀絲の刺繡^{シシュウ}も交つてゐた。是は多分當時の裨褱^{ヒイ}とかいふものだらう。然し母がそれを打掛けた姿は、今想像しても丸で眼に浮かばない。私の知つてゐる母は、常に大きな老眼鏡を掛けたお婆さんであつたから。それのみか、私は此の美しい裨褱^{ヒイ}が其の後小搔卷^{コカキマキ}に仕立て直されて、其頃宅に出來た病人の上に載せてあつたのを見た位だから。

二六 津輕海峽

長田 幹彦

津輕海峽を渡る連絡船は、午後の十一時に立つといふので、九時を打つと、そろ／＼身支度をして、赤帽に導かれながら待合室を出た。線路端の真闇な雪道を二町ほどゆくと、やがて船の出る海ぞひの待合所に來た。ぼやけた電燈が薄暗く點つて、吹きさらしのベシチには、十人にも足りない旅客が、寒さに體を練めながら、ぼんやり船を待つてゐた。

堀割のすぐ外は真闇な海で、護岸に打寄せる波の音が



青 森 港

が、絶えずひた／＼と聞えて來る。遠い沖合には、船體は見せず、ただ燈火だけを舷窓から隠見させながら、連絡船が碇泊してゐる。をり／＼粉雪が渦卷くのか、一列に連なるその光は、ぼうつと淡くにしんで、何處からともなく、遠い風の音が、海上を流れてゆく。

正十二時に錨を卷いた連絡船は、降り罩めた雪の中を、徐々に速力を高めながら、北へ向かつて進航してゆく。今の今まで、南京珠を聯ねたやうに點々と瞬いてゐた青森の町の灯も、次第に遠く薄れて、終には、名残を惜しむやうに最後まで輝いてゐたアーク燈の光さへ、いつの間にか、全く濃い夜の闇の底に葬られてしまつた。それと同時に、舷を打つ波は、咽ぶやうな哀切な音を響かせて、水や空とも分かぬ一様の暗闇が、船の周圍を悉く引包んでしまつた。

二七 雪合戦

大町 桂月

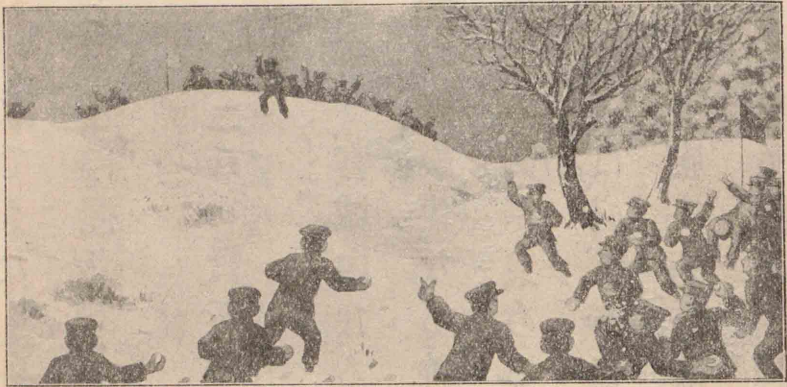
學校へ行く途中から、雪がちらちらと降り出した。第一時間目の授業が終つた頃には、もう、そこら一面眞白になつた。雪はますます降りしきる。第三時間目がすんだ時、午食後、雪合戦をやりまゝと、校長が言はれたので、皆が勇み立つた。

運動場に出ると、雪は膝まで積つて居る。組々の席順の奇數に當るものを東軍とし、偶數に當るものを西軍とした。西軍は赤い巾を、東軍は白い巾を、一人一人

腕にまいた。兩軍とも、各一旗の旗を押立てて居て、敵軍からそれを奪ひ取つて來れば、勝といふことにした。私は西軍の方である。

一聲の喇叭を合圖に、兩軍とも、守備隊と攻撃隊とに分れて、戦鬪を始めた。私は攻撃隊に加つて前進した。鬪の聲がどつと擧つて、雪の弾丸が一時に亂れ飛んだ。兩軍の相近づくにつれて、雪を握る手が、ますますいそがしい。やがて接戦となると、もう雪などを握つては居られない。すぐに組打になつてしまふ。彼方でも、此方でも、格鬪が始つた。私はわれこそ敵の旗を奪

見事
味方



雪合戦

ひ取つてくれようと、驀地に進んで行くと、敵の一人が前に立ち塞がつて、遣らぬと妨げ、二人三人それに加つて來て、私は忽ち重圍に陥つた。組んづ、ほぐれつ、鬪つて居るうちに、休戦の喇叭が鳴つた。あゝ、わが西軍の旗は、遂に東軍に奪はれたのである。赤白の巾をかなくなり棄てると、

もう敵でもなく、身方でもない。雪にほてつた手と手
とを互に握りあつて、やあ、君愉快だつたね。」

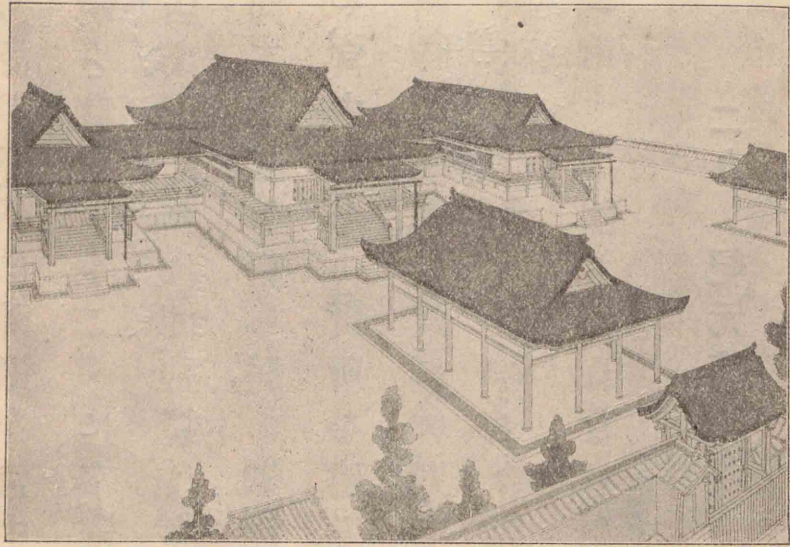
二八 賢所

賢所は、宮城内なる吹上御苑（吹上）の辰巳（辰巳）の方にあり。皇大
神の御靈代（神代）なる神鏡を齋（斎）き奉らせ給ふ所なり。宮中
恆例の御祭典（祭典）あるは申すまでもなく、國家に大事（大事）あ
るときは、必ず奉告の御儀を行はせ給ふ。皇室の大婚
及び皇族の御婚儀等もその御前にて舉げさせ給ひ、
また皇子御誕生、御命名の奉告、親謁の御例あり。文武

祭祝詞

官を海外に遣はし給ふをり、また命を終へて歸朝し
たるをりにも、必ず参拜を仰付けられ、また毎年六月
末日及び十二月末日には、大祓（大祓）を行はせ給ひて、文武
百僚の總代（總代）を前庭に召して参列せしめ給ふ。賢所は
皇室の宗廟にして、また全國民の宗廟なれば、その御
祭典は實に國家の重大事なり。
謹みて賢所の御由來を按ずるに、天照大神、八咫鏡を
天孫天忍穗耳尊（天孫）に授け給ひて、吾が兒、此の寶鏡を視
んこと、なほ吾を視るが如く、床を同じくし、殿を共に
して、齋の鏡となせ。」と宣へり。斯の如くして、この御鏡

は、叢雲劔、八尺瓊曲玉と共に、三種の神器として、歴代
 傳承し給ひ、神勅のまに（神勅）く同床共殿にして、齋き奉
 らせ給ひしを、崇神天皇の御代に至りて、神威を瀆し
 奉らんことを畏みて、倭國笠縫邑に移し奉り、皇女豊
 楸入姫命をして祀らしめさせ給ひ、別に宮中には摸
 造の神器を止めさせ給ひしこと、史に見えたり。その
 後更に天祖神授の八咫鏡は、天祖の御形代として伊
 勢神宮に、八尺瓊曲玉は宮中に、草薙劔は熱田神宮に、
 をさまらせ給ふこととなれり。
 宮中正殿にましましし神鏡は、その後温明殿に移ら



殿 三 中 宮
 (殿神は左御、殿靈皇は右御のそ、所賢は央中)

せ給ひ、久しくそこに
 齋き祀りてありしが、
 後世、大内裏（大内裏）頽廢して、
 里内裏（里内裏）となりてより
 は、春興殿に遷らせ給
 へり。
 かくて明治二年三月、
 都を東京に奠め給ひ
 たるとき、舊皇居に遷
 座し奉り、明治四年九

月、詔して、新に神殿を宮中山里の御内庭に作りて、神鏡と皇靈とをここに奉安し給ひしが、同六年五月、皇居炎上したれば、神鏡は赤坂假皇居に遷らせ給へり。同二十二年新皇居の御造營成りて、遷幸あらせ給ふや、宮中に今の賢所を建てて、神鏡をそこに遷し奉り、同時に皇靈殿並に神殿をその左右に建てて、皇靈と神祇とを齋き奉らせ給ふこととはなれり。宮中三殿と申すは、即ちこれなり。(國家の祭祀による)

二九 紀元節

檀原宮
春日
國高市郡
白檮村

紀元節ハ神武天皇中州ヲ平定シテ、大和ノ國ナル畝傍ノ檀原宮ニテ、御即位ノ禮ヲ行ハセラレタル日ヲ記念スル爲ニ、定メ給ヘル祝日ナリ。此ノ日、天皇陛下ハ、皇靈殿ニ於テ御親祭ヲ行ハセ給フ。其ノ御次第ハ、午前九時、御殿ノ御裝飾ヲ奉仕シテ、朝ノ御祭典アリ。午前九時三十分ヨリ更ニ御親祭ノ儀アリ、午前十時、出御、皇靈殿ニ御玉串ヲ奉ラセ給ヒテ、御拜アリ、御告文ヲ奏シ給フ。次ニ賢所御拜アリ、畢リテ入御アラセラル。續キテ皇后陛下、皇太子殿下、同妃殿下ノ御拜、親王以下ノ拜禮、參拜等アリ。午後五時ニ

ハ更ニ夕ノ御祭典アリテ、御神樂ヲ奏セラル。
 是ヨリ先、陛下、御親祭ヲ濟マセ給ヘバ、諸臣ノ參賀ヲ
 受ケサセ給ヒ、午前十一時、豐明殿ニ出御アリテ、群臣
 百官ニ酺宴ヲ賜フ。御宴ノ間ニハ、伶人前庭ニテ舞樂
 ヲ奏ス。

抑、神武天皇御即位ノ日ヲ以テ國家ノ大祝日ト定メ
 ラレタルハ、明治五年十一月十五日、

第一月廿九日神武天皇御即位相當ニ付祝日ト被
 定、例年御祭典被執行候事
 ト、布告セラレタルニ始レリ。尋デ翌六年一月四日、五

節供

節供ヲ廢シテ、右ノ御即位當日ヲ天長節ト共ニ祝日
 ト定メラレ、更ニ同年三月七日、此ノ日ヲ紀元節ト稱
 セラル。コトトナレリ。翌七年、一月二十九日ヲ太陽
 曆ニヨリテ推步シテ、二月十一日ヲ其ノ日ト定メラ
 レ、カクテ今日ニ至ルマデ改ルコトナシ。

古書ヲ按ズルニ、弘仁曆運紀ニ、

神倭磐余彦天皇、年十五爲太子、四十五歲、甲寅、從筑
 紫日向宮、船軍東征、至庚申年、平定中國、辛酉年正月、
 卽天皇位、是爲元年。摠計、從天皇元年辛酉至今上弘
 仁二年辛卯、合一千四百七十一年也。

今上
嵯峨天皇

片時モ報効ノ念ヲ忘ルベカラザルナリ。(雲上秘録ニ據ル)

三〇 日出づる國

中邨 秋香

亞細亞の東の海、

朝日の出づるところ、

秀でし國こそあれ。

くすしき土地こそあれ。

世界に類なく、

地球に冠たり。

五穀
柏葉ギモアソ豆上

春
セリ、ソチ、コギョウ、
ゴ、ホ、ナ、サ
ス、ソ、ロ

係結

原 結 物 動 詞
花 花 花
花 花 花
花 花 花
花 花 花

水清くして、山うるはしく、

土肥えて、五穀ゆたかに、

寶は満ちて、國內にあまり、

五風十雨、氣候正しく、

一系の君、上に尊く、

忠義の國民、下に厚し。

げに神仙の土地なりけり。

うべこそ君子の國とはいひけれ。

も羨うらやまましからず。其の葉落ち盡くして、寒林の千萬枝うきは簇々として空を刺すも可。日落ちて、煙地に満ち、林梢の空、薄紫になりたるに、大月盆の如く出でたる、尤も可。

春來りて、淡褐、淡緑、淡紅、淡紫、嫩黄など、和らかなる色の限を盡くせる新芽を作るときは、何ぞ獨り櫻花に奔らんや。

青葉の頃、此の林中に入りて見よ。葉々日を帯びて、緑玉、碧玉、頭上に蓋を綴れば、吾が面も青く、若し假睡せば、夢亦緑ならん。

初昔の時候には、林を縁どる萩は色づき、薄は穂に出で、女郎花、荇、萱、林中に亂れて、自然は此處に七草の園を造れり。

月あるも可、月なきも亦可、風露の夜、此等の林のほとりを過ぎよ。松蟲、鈴蟲、轡蟲、きりくす、蟲といふ蟲の音、雨の如く流るゝを聞かん。おのづから蟲籠となれるも妙なり。

三三 一燈錢

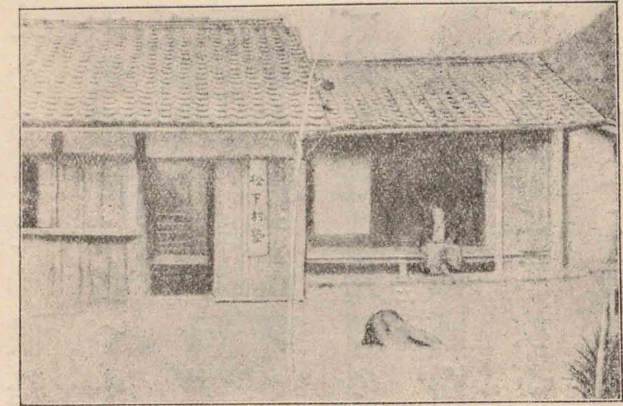
久坂玄瑞

此度同社中申合はせ、自分自分の力を盡くし、骨

を折りて、サツ蹟細の事ながらも、相儲け置きたきこ
 とに候。非常の變、不意の急に差懸り候うても、囊
 中拂底にては、差支ふるものに候。有志の人の牢
 獄に繫がれ、又は飢渴に迫り候者もおひく相
 助けたく、義士義士節婦の碑を立て、墓を築く事にも、
 力を盡くし、手を伸したきことに候へども、同社
 中、有餘りの金もあるまじきことに候へば、毎月
 寫本なりともして、僅の儲致し置きたく、月末、松
 下塾まで銘々持ち寄り致すべく候。半年にもせ
 よ、一年にもせよ、塵も積れば山となる理にて、き

松下塾
 吉田松陰の塾
 なり。山口縣
 長門國秋の東
 郊にあり。

つと他日の用に相立つべく考へられ候。同社中、



松 下 村 塾

身の膏を搾り出して集む
 ることなれば、迂闊に費す
 べきにあらず、已むを得ざ
 る事あらば、同社中申合は
 せの上にて取扱申すべく
 候。抑、人を救ふも、用に備ふ
 るも、富貴長者の身ならば、
 いかやうにも相計らふべ
 けれど、我々にては、かくまでにするは、貧者の一

貧者の一燈
 昔、佛に供へ
 たる王の萬燈
 は風に消えた
 れど、貧女の
 一燈のみは消
 えざりきと、
 佛經に見えた
 る故事。

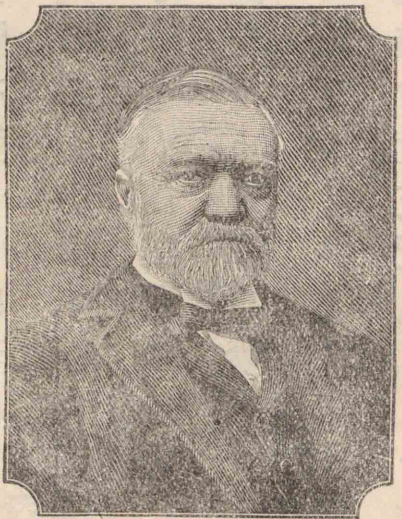
A kind boom west

スコットラ
ンド
イギリスの一
部。
ダンファ
ムリン市
スコットラ
ンドの東南部に
あり。

實に近世富豪の模範たるべき人なり。
偉大なる世界的富豪カーネギー、彼何者ぞ。彼は如何
にして數億の富を作りしか。吾等はこの人の傳を讀
み、その嘗て絲卷小僧たり、汽罐火夫たり、電信技手た
りしことを知るに及びて、益之を尊敬せざるを得ず。
而してその有する莫大なる富が、一代の間に作り上
げたるものなるを聞けば、坐漫何ナ不可思議の感に
堪へざるなり。

アンドリュー・カーネギーはスコットランドのダンファ
ムリン市なる機業者の家に生まれたり。彼の十一

歳の時、その家、生計困難となりしかば、一家四人、米國
に渡りて、ペンシルヴァニア州ピッツバーグ市に移住し、



カーネギー

父は某木綿工場に職を
求めて、辛うじて一家を
支へたり。カーネギー十
二歳にして、亦父の勤む
る工場の絲卷小僧とな
り、一週一弗二十仙の工
賃を受けたりしに、忽ちその勤勉、勵精を監督者に認
められ、擢トモでられて、翌年早くも責任重き汽罐火夫と

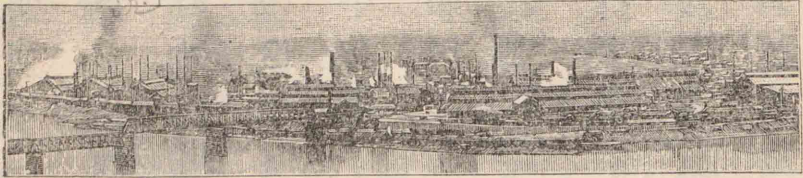
なれり。二ヶ年の後には更に又電信技手となりて、通信事務に従事し、漸く進みて、十六歳の時には、年俸六百圓を受くるに至れり。この間カーネギーは學校に入ることを得ず、また正則の教育を受くること能はざりしかば、業務の餘暇に書籍、新聞紙等を讀みて、見聞を博め、知識を養へり。（常手）
 やがてカーネギーの非凡なる才幹は、同郷人なる某鐵道會社支配人トーマスコットに知られ、同社の電信技師兼運輸係に擧げられて、年俸七百圓を給せられたり。これよりカーネギーはスコットの股肱となり

南北戦役
 米國の内亂なり。

て、會社のために盡力し、その名漸く儕輩の間に聞ゆるに至れり。一八六一年南北戦役起りて、スコットの陸軍次官に擧げらるゝや、カーネギーも亦出征して、交通任務に従事したるが、敵彈に中りて負傷し、これより大いに戦争を憎むの念を生ぜり。後年彼が平和思想の鼓吹に力を用ゐるに至れるは、その由つて來る所、蓋しこゝに存するにあらざるか。（鼓吹）
 その後、カーネギーはウッドラフ寢臺會社及びコロンビヤ石油會社に關係して、多額の利益配當を得、一方にては地位類に進みて、ペンシルヴァニア鐵道會社ビッ

ツバードグ區の監督部長となれり。この時、鐵道線路中の木橋を鐵橋に改め架したるに、非常に良好なる成績を得たれば、明は眼能物見致ク眼炯眼冷字炯景なるカーネギーは早くもこゝに著目して、將來鐵橋の有望なることを知り、その鐵材を供給せんがために、友人と共にキーストン橋梁工場を設立して、オハイオ州の大鐵橋を架設し、莫大なる利益を得たり。

こゝにカーネギーは鐵道會社を辭して、獨立して事業を經營し、著々と功を收めたれば、名聲隆々ツカヒとして揚れり。その後、更に多くの鐵山を買收し、採掘したる



ホーリスミスドット鐵工場

鑛石を運搬せんがために、獨力を以て百八十六哩の鐵道を敷設し、かくて遂に世界の富豪を以て稱せらるゝ基を作れり。その經營に屬するホームステッド鐵工場は、敷地二十餘町歩に餘り、職工四千以上を上りて、機械の精巧なること、天下第一の稱あり。この他、各都市に散在する支店を合はすれば、カーネギーの使役者十三萬五千人の多數に達すといふ。その盛況想ふべし。

今年
大正五年。

要するに、カーネギーは甚だ^{シカド} 怜悯なる人にして、機を
 見るに敏なること、常人の企て^{コト} 及ぶべからざるもの
 あり。逆境^{オモウシニシテ} を轉じて^{オモウシヲ} 順境^{オモウシナク} に向かはしめたるは、一にこ
 の怜悯なる天性^{オモウシナク} の然らしめたる所なり。カーネギー
 を非難するものは、その初俸給に衣食せる身を以て、
 如何にして種々の會社に關係する資金を得たるか
 を疑ひ、惡評^{オモウシナク} を傳へたり。事の真相は究むべからず。さ
 れど富豪としてのカーネギーの義舉^{オモウシナク} に至りては、何
 人も賞讚^{オモウシナク} せざるものなし。この人、今年八十歳に達し、
 今まで公共事業に費したる金額は、最近の紐育電報

によれば三億五千萬弗に上れり。而してその現在の
 私財は僅に二千萬弗程に過ぎざるが、この二千萬弗
 も生前^{オモウシナク} に全部公共事業に投ぜらるゝ豫定なりとい
 ふ。^(清貧論による) 前著^{オモウシナク} 著 今年三死

三四 堅志力行

安田善次郎

私の六十年來の經驗によつても、確乎不動の決心と
 百折不撓^{オモウシナク} の堅志とを以て事に當る人の精神ほど、確
 實に信用の出来るものはない。かういふ人が一度斷
 然と決心して、はい、宜しい。承知しました。といへば、こ

一諾千金
得黄金百斤不
如季布一諾
(楚語)

の一言は、どんな言文證文よりも、どんな擔保よりも、遙に
安心が出来る。諺に、「一諾千金」といつてあるのは、眞に
この種の人の決心に始めて見ることが出来るのである。
ある。

さういふ人が一度かうと決心して、或事業に著手し
た以上は、たとひどんな難事業であるにせよ、初に決
心したその時に、もうその事業の大半は遂行年カウしたの
も同じである。そこで、この人が一度事に當れば、たと
ひその事業の中途に、どんな失敗を招いても、どんな
打撃を受けても、これがために責任責を自身に負を避けるやうな

責を負ふ者

ことを断じてしないのは、言ふまでもなく、却つて躓
いた石を取つて、直ちにそれを踏石として進み、終に
目的を遂げなければ止まないのである。故にその事
業に就いて、周圍よりどんな非難妨害非難妨害が來ても、また
その進路にどんな困難障礙困難障礙が起つても、少しも心に
掛けず、たゞその目的に向かつて一直線に猛進する
ばかりである。途中の困難に對して、果して凌凌げるか、
どうかと、狐疑狐疑逡巡逡巡などする違違もなく、たゞどうして
進まうかの一念で、突貫するのである。
故にこの種の人物が成さうと決心したものを止め

Shiroshima
by M.

ようとするのは、言はば太陽の昇るのを止め、潮の満
 ちるのを止めようとするやうなもので、全く無用の
 事であると、誰も承知して居るから、この人の進路を
 妨げるやうの位置に立つて居るものは、自ら避けて
 道を開かずには居られない。非凡な堅志力行の人の
 進路は、すべてかうであるから、その決心に對して成
 功の如何を危惧する必要は、全くないのである。
 要するに、困難とか苦痛とか悲運とかいふやうなも
 のは、畢竟薄志弱行者の愚痴に過ぎないのであつて、
 志望堅固の力行者の進路には、困難もなければ、悲運

もない。却つて悲運を轉じて幸運とし、困難を變じて
 安樂とするのが、意志の力の絶妙な働と謂へるので
 ある。世間で數多の人々が大希望、大抱負を抱いて、成
 功の幸運を目的に、出發しながら、空しく失敗の悲運
 に一生を終へるのは、何故であるか。學問がなかつた
 ためであるか、技能を缺いて居たためであるか、資金
 が缺乏したためであるか。皆違ふ。たとひそれらが一
 分の原因であつたにせよ、その根本をたづねると、堅
 忍不撓の意志の力を缺いて居たことに歸しないの
 はないのである。

三五 老僧の接木

室 鳩巢

將軍家
征夷大將軍德
川家光。
谷中
今の東京市上
野公園の西北
方。

上旬
中旬
下旬
同年

寛永の頃、將軍家、谷中^{谷中}わたり御鷹狩あり、御徒步にて、
此處彼處、過^{通リ}ぎがてに御覽^目ましましけるが、圖^{不圖}らず一
つの寺に御入^{過キカケ}ありき。をりふし、住僧はや八旬^{八旬}に及び
たるが、庭に出でて自ら接木して居けるに、御供の人
才人遅れて、御側には二人三人附き奉れるのみなりし
を、なか^七くやん^尊ごとなき御方とは思ひよらねば、そ
のま、背^七き居たりけり。

將軍家、坊主何事するぞ。と仰せられしかば、老僧心に

怪しと思ひて、いと^{ゴエリヨミ}はしたなく接木するよ。と御答申
しけるに、御笑ありて、老僧が年にて今接木したりと
も、その木の大きになるまでの命も知り難し。それに、
さやうに心を盡くすこと、不用なるぞ。と^{自分上}上意^{ありけ}ありけ
り。老僧、御身は誰人なれば、かく^{カク}心なき事をいひ給ふ
ぞ。よく思ひてみたまへ。今この木どもつぎておきな
ば、後住の代に至りて、いづれも大きくなりぬべし。然
らば林も茂り、寺も^{ヨク茂}黒みなんと、吾は寺の爲をおもひ
てすることなり。あな^神かちに吾一代に限るべきこと
か^反は。といひしを聞かれて、老僧が申すこそ實にも理

なれ。と、御感ありけり。
其内その程に御供の人々おひくゝ來りつゝ、御紋の物ど
御紋の物もも多く集りしかば、老僧それに心得て、大きに懼れ
て、奥へにげ入りしを、御召出ひきだありて、物など賜ひけり
とぞ。

三六 歌聖としての明治天皇 その一

佐々木信綱

新しき日本帝國の建設者にましまし、古今東西にた
ぐひ稀なる英主におはせしわが明治天皇が、同時に

また、わが國風なる和歌の道に御志ふかく、かつ御堪
能にあらせられ、我等國民が精神上の永久の糧たる
精神の永久の糧べき、幾多の作品を遺させ給へるこそ、畏くも我等の
限なき喜とするところにはあるなれ。

天皇の御治世は、前後を通して、わが日本帝國の歴史
上、最も多事なる時代と稱しまつるべきものなりき。
而して、まづ内は徳川幕府の瓦解ワカレ、外は外國との交渉
の發生等、所謂國歩艱難を極めたる間に、新日本の建
設といふ未曾有の大事業を行はせ給ひ、憲法發布、日
國歩の艱難英同盟、日清、日露の二大戦役、韓國併合等、國家の大事

もたぐひなくおはしましき。由來和歌はわが國の歴史と共に起り、歴史に伴なひて榮え、随つて和歌と皇室とは最も關係深く、御歴代の天皇中、九十餘代の天皇の御製は歴史又は歌集に遺り、御集の傳れるも尠からず。中にも、神武、仁德、聖武、醍醐、崇德、後鳥羽、土御門、順德、龜山、花園、後醍醐、後柏原、後水尾、靈元の諸天皇は、いづれも歌仙（歌仙にましまししが、これら御歴代の天皇に並べ奉りても、明治天皇は明に歌人として優秀の地位に居させ給へり。）

三七 歌聖としての明治天皇 その二

天皇が歌に就いて抱かせたまひし御考は、所謂眞心を重んぜられ、それを歌の生命とあそばされしにて、さる御思想は、次の御製によりても、うかゞひ知るを得べし。

おもふことうちつけにいふ幼子の

言葉はやがて歌にぞありける

まごゝろを歌ひあげたる言の葉は

ひとたびきけば忘れざりけり

壯ツギ 樸ツギ
トキ事

歌に對して、かくの如き御考を抱き給ひたりしこと
 とて、天皇の御製は眞情流露、自然の妙味ある趣をも
 て、その理想とし給ひ、かつ十分にこの旨を得させ給
 へり。されば自然の風物に關する御製にも、
 足引の山の端出づる月かげに
 浪の上に朝日にほひて鏡なす
 家をしとおもふ方にもともし火の
 かげ見えそめて日は暮れにけり

の如きは、自然眞率のうちにおのづから感情のゆた
 かなるをおぼゆる御傾向、著しく拜せらる。
 最も我等の感じ奉るは、天皇が畏き大御心よりして、
 或は國家をおぼし給ひ、或は祖神を敬ひ給ひ、或は國
 民を慈み給ひ、或は御修養、はた御訓誡の意を詠じ給
 ひたりし御製なり。由來この種の歌は、或は説明に流
 れ、或は理に落ち、歌として趣乏しきもの多かるが習
 なれど、御製に至りては、いづこまでも高き調と、みや
 びかなる趣とを失はせ給はずして、去かもその御意
 ふかし。これ蓋しこの種の御製が、天皇の高く大いな

御製 天皇御歌
御歌 皇座下ガ
ミツメ云フ

る御人格の、自然の發表にましまししが故にして、その風姿氣品に至りては、到底他の學び奉るを得ざる
ところ。この種の數多の御製は、我等國民の心に、大いなる教訓として、永久の價值を有すべきこと、恰もかの古經典の一言一句にも比し奉るべきものといふべし。

曉のねざめしづかにおもふかな

わがまつりごといかかがあらんと

國のためたふれし人を惜しむにも

おもふはおやの心なりけり

浅みどりすみわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともかな

眼に見えぬ神の心にかよふこそ

人のこゝろのまことなりけれ

四方の海皆はらからとおもふ世に

など波かぜの立ちさわぐらん

とるさをの心ながくも漕ぎよせん

あし間の小舟さはりありとも

埋火によりそひてやは暮すべき

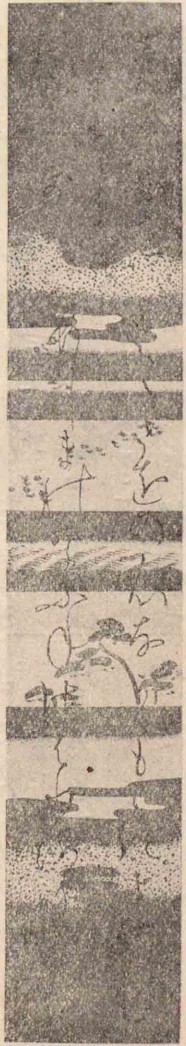
思ひおこさんこともある世に

三國同盟

ハジメニヨリカクツクツク其クシクシトシテ
カキヨクツクツクバカガコルヤウカニカガ出テクル

(昭憲皇太后御筆)

歌 甘盧南州ヲマセヌルオホミ



御製全體を通じて我等が感じ奉るところは、一種雄
 雄しく、高く、ゆたかに、かつ廣やかなる御志らべなり。
 たとへば、うらゝかに晴れたる空に、高鳴る山松風を
 聞くが如く、讀むものをして、その高明悠容なる御志
 らべにおのづから引入られては、知らず識らず大
 いなる王者の威徳御に身の浴化ヨシキヨミシテロカクスルウチナドヲせらるゝを覺えしむ。

これぞまさしく高貴博大なる御人格の自然の發露
 にして、天皇が歌人として有せさせ給ふ獨歩の御特
 質と稱へまつるべく、感歎景仰ロヤムノレツ、ナラニしまつるに堪へざる
 ところなり。

中等國語讀本 卷二終

*Kinderschule
Commercial-School
A 1 by
G. Rabenmüller*

大正六年十月十七日印
大正六年十月二十日發
大正七年一月七日訂正再版印刷
大正七年一月十日訂正再版發行

定價	卷二 各金參拾五錢
卷三 各金參拾貳錢	
卷四 各金參拾貳錢	
至卷五 各金參拾錢	

大正九年臨時
定價金六十錢



大正九年臨時
定價金六十錢

著者 新 村 出
 發行所 東京市小石川區小日向水道町七十三番地
 印刷者 西 野 奈 良 榮
 發行所 東京市小石川區久堅町百〇八番地
 發行所 荻 原 勝 次 郎
 發行所 東京市小石川區小日向水道町七十三番地
 發行所 關 成 館
 發行所 大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角
 發行所 三 木 佐 助
 發行所 東京市日本橋區數寄屋町九番地
 發行所 林 平 次 郎

(株式會社博文館印刷)

晴
日
一
甲
甲
村
義
輝